

先進医薬年報

No. 17

2016年8月

目 次

はじめに	村 松 実	1	
寄 稿			
精神科医療雑感	小 山 司	2	
精神疾患の不分明と精神医学研究の手強さ	白 川 治	4	
年齢制限と任期制雇用が多様性を破壊する	新 蔵 礼 子	6	
飲み会と人生の偶然と研究	出 澤 真 理	8	
平成 27 年度 事業報告並びに決算報告			12
平成 27 年度 選考委員会報告			
精神薬療分野の助成選考経過	岸 本 年 史	18	
精神薬療分野の助成金受領者		19	
血液医学分野の助成選考経過	安 藤 潔	23	
血液医学分野の助成金受領者		24	
循環医学分野の助成選考経過	小 川 久 雄	28	
循環医学分野の助成金受領者		29	
特定研究助成の選考経過	武 田 雅 俊	33	
特定研究助成の助成金受領者		34	
第 48 回 精神神経系薬物治療研究報告会			36
助成研究の成果			
発表論文		38	
財団トピックス			
平成 24 年度（第 7 回）特定研究助成の研究成果報告会		42	
助成金交付認定書伝達式		44	
海外留学だより			47
財団概要			56
賛助会員			64
賛助会員ご入会のお願い		66	



は じ め に

(公財) 先進医薬研究振興財団 理事長 **村松 実**

平成28年度の機関誌の発行に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

当財団は精神薬療研究と血液医学研究並びに循環医学研究に対する助成、顕彰を行い、医学及び薬学に関する先進的な研究の振興を図り、もって国民の医療と保健に貢献することを目的に活動を行っております。本年6月に開催された定時評議員会にて、新たに理事1名が選任され、平成28年度は理事16名、監事2名の運営体制となりました。引き続き先進的な研究の振興につながる活動を展開してまいります。

さて、平成27年度の活動を振り返りますと、助成事業では「精神薬療分野」4,100万円、「血液医学分野」4,100万円、「循環医学分野」4,000万円の研究助成および海外留学助成を行い、特定研究助成では東北大学加齢医学研究所 堀内久徳先生、新潟大学大学院医歯学総合研究科 南野徹先生にそれぞれ1,000万円（2年分割）を交付することといたしました。また、11月に特定研究助成研究成果報告会を、12月に精神神経系薬物治療研究報告会を開催し、当財団の助成による研究成果を発表していただきました。さらに、財団ホームページを全面的にリニューアルし、平成28年度から開始するWeb申請に向けた準備を整えるなど、期初に設定した事業計画を概ね完遂することができました。

平成28年度における当財団の事業内容は基本的に前年度を踏襲いたしますが、今期の活動のトピックスは、当財団活動の第Ⅱ期中期計画を立案することです。平成27年4月より日本医療研究開発機構が本格的な活動を開始し、医療の分野における基礎から実用化までの研究開発が切れ目なく行われ、その成果が円滑に実用化されるように大学や研究機関などが行う研究を支援する仕組みが整いました。そのような環境変化を受け、当財団の活動についても、その目指す姿、あるべき姿を実現するうえで最も効率的、かつ効果的な内容に見直す時期に来ていると思います。第Ⅱ期中期計画策定に当たっては、中期計画諮問委員会を設置し、5年、10年のスパンで果たすべき役割について徹底的に議論する予定です。

なお、当財団の事業計画の立案と実行に当たりましては、評議員、役員、選考委員の先生方、並びに出捐会社であります田辺三菱製薬株式会社、そして賛助会員の皆様方のご理解とご支援を頂いております。厚く御礼を申し上げますと共に、引き続きご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



精神科医療雑感

(公財) 先進医薬研究振興財団 理事 小山 司

(大谷地病院 臨床研究センター長、北海道大学 名誉教授)

21世紀は、心の世紀と呼ばれてきた。事実、日本の精神科医療にも評価すべき大きな変革があったと言える。まず、病院から地域への移行、脱施設化の流れが鮮明となった。総合病院の精神科では、一般医療との差別を認めていたいわゆる医療法特例が改正され、精神科が内科や外科などの一般診療科と同じマンパワーを持つことが可能となり、多職種スタッフの参加による高度なチーム医療が展開されるようになった。また、バブルの崩壊や日本社会のグローバル化などの社会的背景要因によって、精神科外来患者の増加が続いている。さらに、緩和ケア医療や総合医学診療におけるメンタルヘルスの位置づけなど、精神科医療の敷居が取り払われ、医療全体のなかに精神医学的アプローチが確実に定着されつつある。

精神科医療のあり方は、精神疾患に関する伝統的な疾病観や治療文化、治療者の属性、医療制度など、種々の社会・文化・経済的条件によって大きく制約されることは言うまでもない。現在までに、先進国、途上国を問わず、望ましい精神医療システムの構築のために、実に多様なアプローチが展開されてきた所以である。各々の国において特色ある独自の精神医療の発展が期待できるのである。最近、中国の友人である精神科教授から依頼があり、精神衛生センター視察団のご案内を手伝い、中国の精神科医療の現状と課題について知る機会があった。日本の精神科医療の歴史と現状との対比において、大変興味深くおもったのでその一部を紹介することとする。

2009年の疫学調査によると、中国の精神障害者は1億人以上に上り、これは15歳以上の成人の約18%にあたり、このうち重度の精神疾患患者は1,600万人を超えている。内訳は、うつ病が約6%、不安障害が約6%、アルコール薬物依存による障害が約6%という結果が報告されている。中国が2002年に行った自殺に関する初めての調査によれば、年間自殺者は287,000人に上り、国際平均を上回っている。また、15～34歳の死亡原因のうち自殺はトップとなっており、事態は深刻である。

こうした精神衛生の現状と裏腹に、専門的な医療機関や専門医療従事者の不足が問題となっている。中国疾病予防センターのデーターによれば、2005年末時点で全国に精神疾患医療機関はわずか527ヶ所しかなく、精神病院の病床数は人口万対1.2（国際平均は15前後）であり、精神科医の人数はわずか2万人弱、国民10万人あたりの精神科医師数は1人前後と、国際平均の4分の1にとどまっている。精神疾患医療サービスが著しく不足しているのが、中国の現状である。

1980年代に市場経済システムを導入した後、中国は急激な経済成長を遂げ、今や米国に次ぐ世界第2位の経済大国となっている。しかし、経済成長の実現が優先されるが故に、深刻な公衆衛生

部門の問題が先送りされることは歴史の事実でもある。日本において、1918年に東京帝国大学精神医学講座の呉秀三教授は、当時の精神科医療の過酷な実状を調査し、「我邦十何万ノ精神病者ハ実ニ此ノ病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ生マレタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」という痛烈な批判を行ったことは、余りにも有名である。

中国政府は立ち遅れている精神科医療・保険福祉の発展を促進するため、2002年「中国精神衛生事業計画」を策定し、①精神衛生法及び関連政策の制定、②精神衛生サービス体系の形成、③精神科医療及びリハビリテーションサービスの改善、④精神衛生関連機関の整備、⑤人材養成、⑥精神保健知識の普及、などに重点的に取り組んでいる。上述したように、医療資源の不足、社会保障システムの不備、地域間格差の存在など解決すべき課題は多く残されているようである。一方、大都市である上海は2002年4月から全国初の「精神衛生条例」を独自に制定し、その他の地域（寧夏市は2005年、北京市・杭州市は2006年、無錫市は2007年、など）においても精神衛生条例の制定が少しずつ進められている。

周知のように、日本の精神科医療の大部分は私的経営であり、その枠内で展開されるという制約がある。一方、中国の精神科医療の中心は公的機関であり、国家としての望ましい精神科医療への方向転換が可能である。いずれも一長一短あって、完全ではない。それだけに両国間の継続的な交流は重要であり、今回の中国精神衛生センター視察団との交流は大変意義深いものがあつた。両国の精神科医療のさらなる発展に大いに期待したい。



精神疾患の不分明と精神医学研究の手強さ

(公財) 先進医薬研究振興財団 評議員 白川 治

(近畿大学医学部 精神神経科学教室 教授)

精神科診療では、診断の持つ意味について考えさせられることが度々ある。患者から「私の病名を教えてください」と問われることも時にあるが、そんなとき患者にとって病名はどんな意味をもっているのか、病名が一人歩きして誤解しないだろうかなど思案する。こんなやりとりは精神科ならではのとも言えるが、精神疾患のカテゴリーが時代や文化の影響を少なからず受けることを考えると、診断のあり方を意識しないわけにはいかない。最近でも、統合失調症の軽症化、広汎性発達障害の拡がりなど、診断をめぐる話題には事欠かない。精神科診療の敷居が低くなり、精神疾患に対するスティグマが希釈するにつれ、不適応の原因を患者自ら安易に精神疾患罹患に結びつける傾向も稀ではなくなっている。そうした診療の現場での精神疾患像と研究対象としての精神疾患像に大きな齟齬はないのだろうか。

精神科医になってしばらくは、統合失調症か双極性障害かなどの鑑別診断についてケースカンファレンス等で議論をすることがしばしばあったように思うが、最近ではこうした並列的な（横方向の）鑑別診断よりも、特に精神病圏を考える上では、最も病理性の深い状態を統合失調症の重度の荒廃状態とする垂直的な（縦方向の）単一精神病論的な視点の有用性を痛感している。例えば、統合失調感情障害を並列的な視点で考えると、統合失調症と双極性障害（ないしはうつ病）の混在と捉えるが、垂直的な視点からすれば比較的軽症の統合失調症は躁とかうつといった気分症状を呈しやすいことを意味していると言える。中等症以上の統合失調症の中核的な症状が感情の平板化（感情鈍麻）であることからすれば、その視点の妥当性にも頷けるだろう。

数年前から躁うつ病（双極性障害）の専門外来を開設しているが、受診する患者の多くは双極性障害の診断が不適切とは言えないものの、社会適応度は明らかに低下し残遺症状を呈しているケースである。こうしてみると、双極性障害といっても、高い社会的適応度を維持する方から社会的適応不全が著しい方まで臨床経過からすれば実に多様である。双極性障害のように内因性精神疾患の代表ですらこうなのだから、多くの精神疾患（概念）は生物学的には途方もなく多様で異種性に富んでいるにちがいない。

遺伝子レベルから神経画像に至る脳科学の急速な進展により精神疾患の生物学的側面を明らかにする試みは加速し、精神疾患の病態解明とバイオマーカーの同定に向けて重要な知見の蓄積とともに着実な進歩がみられている。一方で、臨床の現場で活用できるバイオマーカーが次々と同定される見通しが立っているとは到底言えない。

そもそも、研究に“生物学的”を冠する必要があること自体、他の医学領域ではまずあり得ないことだが、精神疾患に対する生物学的アプローチにはいくつかの困難な課題がある。まずあげられるのが、先に述べた研究対象となる精神疾患概念の曖昧さである。疾病を規定する精神症状の構成、特異性が明確でないままに、クレペリン以来の並列的な（横方向の）疾患体系を踏襲した形で疾患カテゴリーが形づくられている。代表的なカテゴリー診断基準であるDSMでも、19年を経て改訂されたDSM-5（2013年）でさえ生物学的知見を導入するには至らず、症候学的規定の細部の改訂にとどまった。臨床現場での実用性の保持を考えるとやむを得ないとも言えるが、DSMが提示するような疾患カテゴリーに依拠する限り、精神疾患の生物学的研究にブレイクスルーはないとする見方もある。そうしたなかで、NIMH（National Institute of Mental Health）により伝統的な疾病概念にとらわれない Research Domain Criteria（RDoC）を用いたプロジェクトが近年進められている。精神疾患における不快の感情価（negative valence）、快の感情価（positive valence）、認知、社会性、覚醒・制御の5つの機能ドメインに着目し、それぞれに遺伝子、分子、細胞、回路、生理、行動、自己報告、パラダイムの解析単位を設けている。疾患をカテゴリーからディメンジョンへ一旦転換、解体し、新たなカテゴリーを目指すことになるであろう。こうしたアプローチにより従来の疾患カテゴリーは解体し新たな再構成に向かう可能性を秘めている。バイオマーカーを導入しつつ臨床の現場で実用性が高いカテゴリーとして精神疾患の再構成が可能となるのか興味のあるところである。ところで、こうしたアプローチの基本にあるのは、構造化面接や評価尺度等による精神症状の“客観的”な評価である。しかし、精神疾患の診断は患者との交流のなかで患者の内面的世界に触れることで可能となるとも言えるため、構造化面接や評価尺度などでは到底カバーすることができない領域を含んでいるように感じる。この点が、生物学的アプローチの限界であるとともに、精神病理学と長年相容れない所以でもある。

いずれにしても現在の生物学的アプローチの問題点は、客観性を重視するあまり疾患評価が横断的で平面的にすぎることであろう。すなわち、精神疾患の診断に必要な病態水準（垂直軸）に加え、時間経過とともに精神症状は移ろい、診断すら変わりうるという縦断的視点、時間軸の欠落である。一人の患者を担当して5年、10年と経つと精神症状の変容に驚かされることは稀ではない。

精神病理学がある精神疾患を症候学的にどう規定するかをひたすら追求してきた一方で、生物学的精神医学もカテゴリー化した精神疾患を生物学的にどう規定するかに邁進してきたようにみえる。考えてみれば、精神病理学も生物学的精神医学も精神疾患の理念的存在を前提として、総じて静的にアプローチしてきたわけで表裏一体と言えなくもない。

万一、生物学的精神医学の急速な進歩により精神疾患が脳神経疾患化したとき、精神医学の立ち位置はどうなるのだろうか。精神医学は依然として医学としては未熟な側面を有するもののヒトの人生に意味・意義を与えるためにも必要な領域であり続けると私は考えたい。



年齢制限と任期制雇用が多様性を破壊する

(公財) 先進医薬研究振興財団 選考委員 **新蔵 礼子**

(奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス科 教授)

どこへ行っても聞かれる話題であるが、生命科学系の研究者を目指すことがますます難しくなっている。いや、若者が希望を持って人生を謳歌することが難しくなっている。いつから日本はこのようになったのだろうか？それとも私が世の中を知らなかっただけなのか？今年の3月までの6年間、長浜バイオ大学の教授として学生の教育と研究活動を行ってきたが、医学部を飛び出して初めて世間というものを知った気がする。学生の就職活動を見ていると、100件を超えるエントリー、理由もなく一次選考不合格の知らせが来る、面接に行けばこれまたよくわからない理由で不合格、このようなことが数ヶ月続くうちに学生たちは自己を否定されどこでも良いから内定をもらいたい気持ちが先に出て、自分の将来の夢などはどこかに置き忘れてしまうようだ。一流の大学なら就活が容易かというところでもないようで、某一流国立大学卒業予定の知人のご子息は仁義なき戦いに嫌気がさして途中で就活をやめた。学生から面接の様子を聞いて、‘企業あるいは社会は若者に一体何を求めているのだろうか、使い捨てできる単に御しやすいコマを求めているのか’、という怒りにも近い疑問が頭から離れなかった。就活の困難さだけではなく、児童虐待やこどもの貧困率の高さなど、日本の将来をますます暗くしそうなニュースが最近多い。

研究者を目指す若者に話を戻そう。高い学費を捻出して長年大学院に在籍して学位を取得しても定職につける見込みはほぼなく、よくて任期付きのポスドクである。定職の一番初めの段階の助教になる条件は40歳未満で留学経験があると選考でプラスになる。しかし、これも任期制で5年間を2回、という雇用条件が多いようだ。その後は何の保証もない。よくできる学生ほど、後期博士課程在学中に学位を取得する前に良い就職口を見つけて退学する、という話も聞いた。では、いったい誰がこれからの日本の生命科学を担っていくのかしら、と誠に不安である。

そもそも研究者は昔から特殊な職業で身分の安定が保証されているとは多くの人は思っていなかったと思う。にもかかわらず、研究者を目指す若者は一定数いて今日の日本の生命科学を支えている。将来は不確かだけれども、自分が行っている研究に誇りを持ち、いつか日の目を見るだろうという希望を失わずに研究を継続できる最低限の身分が保証されていたということだろう。子が親を見て育つように、研究者も身近の先輩研究者を見て自分の将来像を描く。私が心配するのは若者が見るべき中堅研究者の状況の悪さだ。先ほど、助教の選考条件に言及したが、40歳を超えたポスドクが行き場なく溢れていて30代後半のポスドクは40歳になる前のしかも短い任期内にポジションを得るための活動(研究者の就活)に忙しくて落ち着いて研究ができないという状況である。

これをそばで見ている若者が研究者になることを目指さなくなるのは当然であろう。

40歳を超えたポスドクの中には運悪く定職に恵まれなかったが、貴重な経験と知識を蓄えた研究者がいると私は信じる。40歳前に留学も終えたエリートは優秀ではあるけれど、いわば金太郎飴である。エリートコースの外を走ってきた40歳すぎのポスドクは失敗から得た多彩な知識を持っており、若者とPIだけの議論では生まれない独創的な広がりや研究に与えるはずである。特に医学研究において、臨床の場で患者を診ることで得る経験や知識は、例えば細胞株だけで行うがんの研究では見つからない新たな視点を基礎研究に必ず与えると思う。

文科省の提言に従わないと、大学の交付金を減らされるということで各大学は年齢制限と任期制雇用で人材流動を図っている。果たして現場の研究者はこの状況を将来のためになると思っているだろうか。せっかく育てた人材を年齢や任期だけで首切りするというのは国の財産を捨てているようなものだ。すべての研究者がPIになるのは非現実的である。しかし、PIでなくてもPIの元で独創的な研究を継続できる場を経験豊富な40歳すぎの中堅研究者に確保することができれば日本の生命科学の底上げができると思う。

気恥ずかしいことを書いたが、このような機会なのでもっと言ってしまう。どんな職業に就いていても、主婦も含めて、自分の生き方に誇りを持つことを日本人は思い出すべきである。勝ち組や負け組などは他人が決めることでなく、自分が一生懸命に生きていることに誇りを持つべきである。年齢や性別、職業の種類も関係なく、それぞれ多様な側面で自分の信じる生き方（義務）を貫き、それに対して生活を保障する対価が払われれば、社会全体がスムーズに動くはずである。至極当たり前であるがなぜか現実はそうならない。

本財団の選考委員をさせていただく中で嬉しかったことがある。ある年の選考会議で申請書に年齢を記載する場所がないので年齢を記載することにしてはどうかという意見が出た。簡単な履歴を記載する欄があるのでそれを見れば年齢はだいたい予想がつく。会議の結論は年齢欄不要ということだった。年齢や所属などで判断するのではなく、研究提案の内容で点数を付けるべきだ、という意見が大勢だったと思う。42歳で初めて大学の助手になり、その後も年齢制限で苦しんできた私はテーブルの下で思わずガッツポーズをした。近い将来、老若男女が自分の居場所で生き生きと過ごせる社会になるよう、諦めず機会があれば声を上げたい。



飲み会と人生の偶然と研究

(公財) 先進医薬研究振興財団 選考委員 **出澤 真理**

(東北大学大学院医学系研究科 細胞組織学分野 教授)

寄稿のご依頼を賜り、何を書こうものかしばし考えたが、堅苦しい再生医学の話や Muse 細胞の話ではなく、今回はがらりと趣向を変えてみることにした。

まだ未発見の現象や原理は恐らく我々の日常に転がっている。発見のチャンスは恐らく誰にでも訪れているのだが、問題はそれに気がつくかどうかである。とはいえ、これはなかなか難しいことである。

科学のアプローチには大きく分けて2タイプがある。論理から入るか、現象から入るかである。前者は論理を駆使して仮説を立てて実験で検証するものであり、後者は現象を見て仮説を立ててそれを検証していくものである。私は小難しい論理はどうも苦手で感覚的に生きている人間なので、自然を観察し現象から入るタイプだと思う。ただ、生来の粗忽な性格から失敗をしでかしたことで、人があまり持たない「変な癖」を持っていたこと、そして人生の偶然が幸いして Muse 細胞を発見することができた。あまり高尚な話ではなく恐縮ではあるが。

私は2000年頃から成体の骨髄から樹立した間葉系幹細胞の研究に取り組み始めたが、ある時一緒に実験をしていたテクニシャンの人に「普通に血清と培地だけで細胞を培養しているのに、気持ちの悪い細胞塊ができているからちゃんとした実験に使えないと思われる、捨ててもよいか」と聞かれた。2003年頃のことだったと記憶している。どんな塊なの？と顕微鏡を覗くと、細胞塊の中に毛のような構造があり色素細胞のような細胞もある。遺伝子操作やサイトカイン投与していないで形成されたということは、自発的にできたということになる。この塊を見たときに、ふとあるものに似てるなあ、と思った。多能性幹細胞である胚性幹細胞（ES細胞）である。ES細胞はある条件で培養すると毛や軟骨や多様な組織を細胞塊の中に形成する「胚葉体」を形成する。ただ、当時我々の研究室では誰もES細胞など扱ってもしなかったもので、ES細胞がコンタミしたとは考えにくい。となると、成体の間葉系幹細胞の中にES細胞のような細胞がいる、ということかもしれないし、もしそうであれば、重要な知見になると思われた。

そこでこの細胞の同定をしようと取り組み始めた。しかし、如何に手を尽くしても同定することができなかった。ある年は正月まで返上して取り組んだが、結果は惨敗であった。この間、他のプロジェクトも進めていたのであるが、あの細胞塊のことを忘れたことはなかった。しかしチャンスというのは、「もうだめだ」と諦めかけたときにやってくる。

4年も経った2007年の夏である。その頃は間葉系幹細胞に遺伝子導入とサイトカインを組み合わ

せ、骨格筋を誘導しモデル動物に移植する実験を行っていた。この誘導した骨格筋細胞群には分化した多核の筋管細胞、未分化な単核の筋芽細胞と、骨格筋の幹細胞の3種類が含まれていた。この骨格筋細胞群の継代培養の作業を行っていた最中に共同研究者から電話が入った。飲み会の誘いである。1時間後にワインを飲みに来るから来い、というのである。いささか急な話であり、飲み会を優先するとなるとかなり実験を急がなくてはならない。飲み会と実験とどちらが大事か、その日の気分は飲み会の方が遙かに大事であった。大事というよりは、要するに飲み会のほうに断然行きたかったのである。どうせ暑い夏の夕方である。気分転換も欲しかった。そこで大急ぎで実験を済ませて、駆けつけることにした。

さて翌朝のことである。いささか二日酔い気味の頭を抱えて実験室に戻ってきた。昨日行った継代培養の細胞を取り出してみると、まずは通常の薄いピンク色であるはずの培地が黄色いことに気がついた。あれ？何でだろう、と思ったが顕微鏡で覗いてみると、驚いたことに細胞は培養皿のどこにもなく、すべて消えてしまっていた。他の培養皿も見たが同様であった。二日酔いもいっぺんに吹っ飛んだ。あれだけ大量にあった細胞群が何故すべて消えて無くなったのか、自分でも理解できず混乱したが、昨日の自分の行動を冷静に思い返してみると、もしかしたら培地を加えて細胞を植え継いだつもりが、消化酵素のトリプシンを間違えて入れてしまっていたのではないかと気がついた。思えば両者とも同じ色である。飲み会に行こうと慌てていたのも、それぞれの液の入ったチューブに表示を書かず、そのために混同してしまったようだ。

自分の大ドジに愕然とし、頭が真っ白になりながらも私は30分以上もの間、何も細胞が無い培養皿を眺めていたと思う。私には変な癖があり、失敗したサンプルを捨てる前に、じっくり観察し、いろいろと十分に見尽くして楽しんでから捨てるという習性がある。そうやって眺めているとき、ピントが合っていないが、液面の上の方に何かが浮いているような気がした。そこでピントを液面に合わせると、なんと生きた細胞が浮いていたのである。これらの細胞は一晩以上の長時間もの間、栄養が無い消化酵素の中で飢餓状態でありながらも生きていたことを意味する。どうせダメ元だ、と考えてこれらの細胞を遠心して集めて観察すると、上述の3種類の細胞のうち骨格筋幹細胞だけが生き残っていたことが分かった。

確かに幹細胞は成熟し分化した細胞よりはストレスに遙かに強いことが知られている。そこで気を取り直し、この失敗を間葉系幹細胞で再現してみることにした。多能性幹細胞が含まれていると仮定したとすれば、それらは恐らく幹細胞中の幹細胞である、きっと強いストレスで残るはずである。ただし今度は酒など飲まずに、真面目に、である。するとやはり大半の細胞が死ぬが、一部の細胞は生き残った。これらの生き残った細胞を特殊な培養に持って行くとES細胞の胚葉体とそっくりな細胞塊が形成されたのである。4年前にテクニシャンの人がいった「気持ちの悪い細胞塊」は、これだったのである。このようにして成体由来の多能性幹細胞であるMuse細胞を4年ぶりに同定することができた。あれだけ努力しても同定できなかった細胞が、飲み会がきっかけの失敗で到達できたのである。

思い返してみると、人生は偶然の連続であるが研究も同様である。Muse細胞の発見には様々な

偶然が幸いしていた。まず、自分が実験をしている真っ最中に「飲み会」の誘いがあったことである。飲み会が別の日であつたらこの発見は無かつた。そして、その日の気分は飲み会に大きく傾いた、ということも重要である。飲み会に急いだために失敗したからである。また居直るわけではないが、粗忽な性格でドジを踏んだことは大きな幸いであつた。自分が完璧な人間であれば、やはりこの発見は無かつた。そして最後に、変な癖が幸いした。サンプルを捨てる前にじっくり観察して楽しむ、というあまり他の人はしない変な癖である。

私は失敗を「失敗」とは考えないことにしている。道草を食った、程度に考えることにしている。第一その方が気が楽である。人生も悲観的にならずに楽しく過ごせる。失敗も自然現象の一つと思っている。失敗とは、あらかじめ「こうでなければならない」と人間が勝手に規定し、その期待に外れれば失敗と決めつけているに過ぎない。しかし自然界からすれば、それは一方的な決めつけであつて、失敗も成功もないのである。すべてが「現象」なのである。そう考えれば、失敗は発見との出会いの宝庫ともいえる。これから研究を志す若い人たちには、自らの失敗や欠点を必ずしも悲観することはない、失敗を含めて様々な現象との出会いを大事にすればよい、そこには新しい発見が沢山転がっている、ということを伝えたい。



カワセミ

平成 27 年度 事業報告並びに決算報告

平成 27 年度の事業計画にもとづき実施しました助成事業、研究報告会、刊行物等の概要は、次のとおりであります。

1. 運営に関する事項

第 10 回 臨時理事会	平成 26 年度（第 47 年度）「事業報告書」の承認	平成 27 年 5 月 7 日 （書面表決）
	平成 26 年度（第 47 年度）「決算報告書」並びに「監査報告書」の承認	
第 5 回 定時評議員会 第 9 回 通常理事会	議長の選任（評議員会）	平成 27 年 5 月 27 日 （東京）
	議事録署名人の選任（評議員会）	
	評議員の選任（評議員会）	
	役員の選任（評議員会）	
	平成 26 年度（第 47 年度）「事業報告書」の承認（評議員会）	
	平成 26 年度（第 47 年度）「決算報告書」並びに「監査報告書」の承認（評議員会）	
	代表理事の選定（理事会）	
	業務執行理事の選定（理事会）	
	第 6 回臨時評議員会開催の承認（理事会）	
第 11 回 臨時理事会	名誉理事の選任（理事会）	平成 27 年 10 月 7 日 （書面表決）
	定款一部変更の承認	
第 10 回 通常理事会 第 6 回 臨時評議員会	議長の選任（評議員会）	平成 27 年 11 月 5 日 （東京）
	議事録署名人の選任（評議員会）	
	評議員の選任（評議員会）	
	定款一部変更の承認（評議員会）	
	平成 28 年度（第 49 年度）「事業計画」並びに「予算」の承認（理事会・評議員会）	
	平成 27 年度「精神薬療分野」助成金の交付決定（理事会）	
	平成 27 年度「血液医学分野」助成金の交付決定（理事会）	
	平成 27 年度「循環医学分野」助成金の交付決定（理事会）	
	平成 27 年度「特定研究助成」助成金の交付決定（理事会）	
	諸規則改定の承認（理事会）	
	平成 28 年度 定時評議会開催の承認（理事会）	
第 12 回臨時理事会	「プライバシーポリシー」改定の承認	平成 27 年 12 月 22 日 （書面表決）
	「個人情報保護管理規則」改定の承認	
	「特定個人情報等の適正な取扱いに関する基本方針」制定の承認	
	「特定個人情報等取扱い規則」制定の承認	
第 13 回臨時理事会	「循環医学分野 選考委員」の選任	平成 28 年 3 月 2 日 （書面表決）

2. 助成事業に関する事項

1) 精神薬療分野

一般研究助成（第48回） 若手研究者助成（第9回） 海外留学助成（第19回）	募集期間	平成27年4月1日～6月15日	
	評価	精神薬療選考委員	平成27年7月6日～8月17日
	選考	精神薬療選考委員会	平成27年9月12日
	評議	第6回臨時評議員会	平成27年11月5日
	交付決定	第10回通常理事会	平成27年11月5日
	助成額と件数	一般研究助成 2,500万円 交付件数 24件（応募件数 96件） 若手研究者助成 1,000万円 交付件数 10件（応募件数 55件） 海外留学助成 600万円 交付件数 3件（応募件数 8件）	
	交付	平成27年12月	

2) 循環医学分野

一般研究助成（第14回） 若手研究者助成（第14回） 海外留学助成（第10回）	募集期間	平成27年4月1日～6月15日	
	評価	循環医学選考委員	平成27年7月6日～8月17日
	選考	循環医学選考委員会	平成27年9月19日
	評議	第6回臨時評議員会	平成27年11月5日
	交付決定	第10回通常理事会	平成27年11月5日
	助成額と件数	一般研究助成 2,400万円 交付件数 24件（応募件数 91件） 若手研究者助成 1,000万円 交付件数 10件（応募件数 63件） 海外留学助成 600万円 交付件数 3件（応募件数 13件）	
	交付	平成27年12月	

3) 血液医学分野

一般研究助成（第34回） 若手研究者助成（第17回） 海外留学助成（第33回）	募集期間	平成27年4月1日～6月15日	
	評価	血液医学選考委員	平成27年7月6日～8月17日
	選考	血液医学選考委員会	平成27年9月26日
	評議	第6回臨時評議員会	平成27年11月5日
	交付決定	第10回通常理事会	平成27年11月5日
	助成額と件数	一般研究助成 2,500万円 交付件数 24件（応募件数 110件） 若手研究者助成 1,000万円 交付件数 10件（応募件数 62件） 海外留学助成 600万円 交付件数 3件（応募件数 7件）	
	交付	平成27年12月	

4) 特定研究助成

特定研究助成（第10回）	募集期間	平成27年7月1日～8月31日	
	評価	特定研究選考委員	平成27年9月7日～25日
	選考	特定研究選考委員会	平成27年10月7日
	評議	第6回臨時評議員会	平成27年11月5日
	交付決定	第10回通常理事会	平成27年11月5日
	助成額と件数	2,000万円 交付件数 2件（応募件数 45件） 助成金は2年分割で交付	
	交付	平成28年1月	

3. 特定研究助成研究成果報告会に関する事項

平成 24 年度 特定研究助成研究成果報告会の開催

日 時	平成 27 年 11 月 5 日（木） 18：00 ～ 18：30
場 所	三菱開東閣（東京）
口 演 発 表	1 演題

4. 研究報告会に関する事項

第 48 回 精神神経系薬物治療研究報告会の開催

日 時	平成 27 年 12 月 4 日（金） 13：00 ～ 17：30
場 所	千里ライフサイエンスセンター（大阪）
口 演 発 表	8 演題
ポスター発表	22 演題
特 別 講 演	1 演題

5. 刊行物に関する事項

機関誌「先進医薬年報」No.16	平成 27 年 8 月 20 日発行 2,400 部
2015 年度 研究成果報告集	平成 28 年 3 月 25 日発行 1,000 部

貸 借 対 照 表

(平成 28 年 3 月 31 日 現在)

(単位：円)

科 目	当 年 度 (A)	前 年 度 (B)	増 減 (A) - (B)
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	50,782,751	47,008,937	3,773,814
流動資産合計	50,782,751	47,008,937	3,773,814
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
投資有価証券	347,955,038	447,655,038	▲ 99,700,000
定期預金	652,044,962	552,344,962	99,700,000
基本財産合計	1,000,000,000	1,000,000,000	0
(2) 特定資産	—	—	—
(3) その他固定資産	—	—	—
固定資産合計	1,000,000,000	1,000,000,000	0
資産合計	1,050,782,751	1,047,008,937	3,773,814
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払金	1,958,025	2,284,488	▲ 326,463
預り金	0	0	0
流動負債合計	1,958,025	2,284,488	▲ 326,463
2. 固定負債	—	—	—
負債合計	1,958,025	2,284,488	▲ 326,463
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
寄附金	1,000,000,000	1,000,000,000	0
(うち基本財産への充当額)	(1,000,000,000)	(1,000,000,000)	(0)
(うち特定資産への充当額)	(—)	(—)	(—)
2. 一般正味財産	48,824,726	44,724,449	4,100,277
(うち基本財産への充当額)	(—)	(—)	(—)
(うち特定資産への充当額)	(—)	(—)	(—)
正味財産合計	1,048,824,726	1,044,724,449	4,100,277
負債及び正味財産合計	1,050,782,751	1,047,008,937	3,773,814

正味財産増減計算書

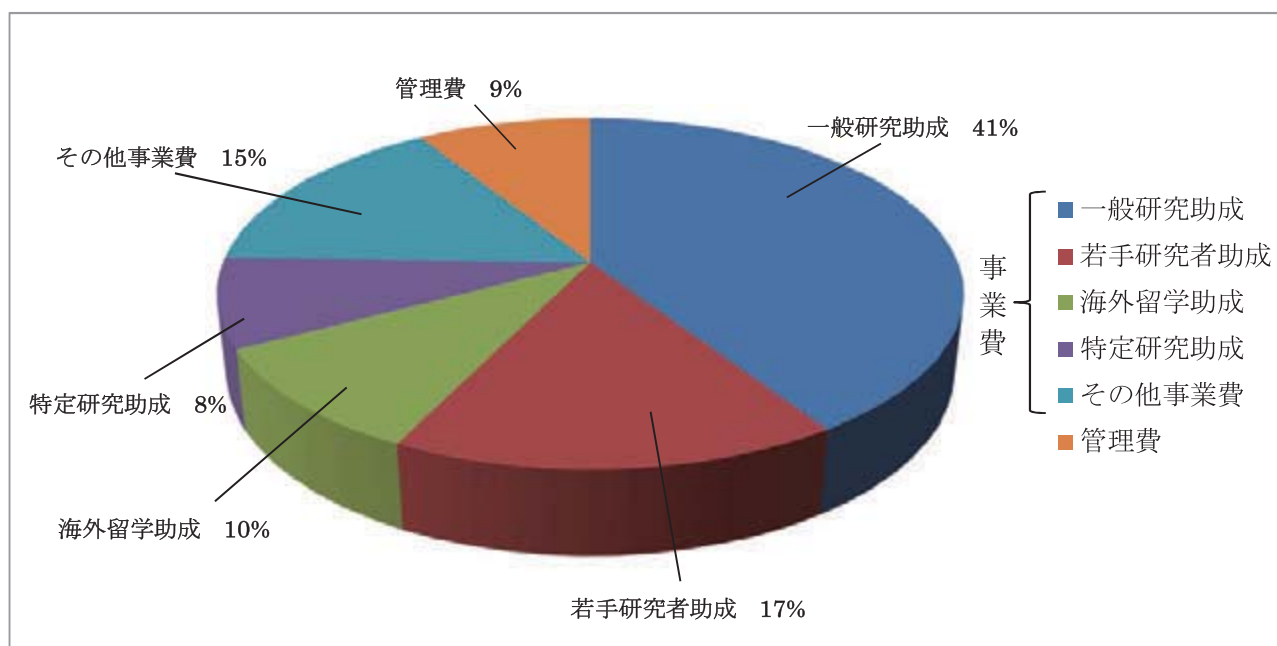
(平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日まで)

(単位：円)

科 目	当 年 度 (A)	前 年 度 (B)	増 減 (A) - (B)
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益			
基本財産受取利息	4,949,065	4,968,388	▲ 19,323
受取会費			
賛助会費	680,000	758,000	▲ 78,000
受取寄附金			
寄附金	180,000,000	180,000,000	0
雑収益			
預・貯金利息	15,212	13,280	1,932
経常収益計	185,644,277	185,739,668	▲ 95,391
(2) 経常費用			
事業費	165,280,712	155,078,968	10,201,744
役員報酬	3,437,959	3,006,822	431,137
給料手当	7,560,000	9,759,203	▲ 2,199,203
会議費	2,640,239	2,354,015	286,224
交通費	3,797,247	4,324,145	▲ 526,898
通信運搬費	328,081	267,380	60,701
印刷製本費	3,187,228	3,522,877	▲ 335,649
賃借料	916,272	1,678,320	▲ 762,048
諸謝金	1,436,673	1,225,070	211,603
選考料	3,040,401	3,040,401	0
支払助成金	137,000,000	125,000,000	12,000,000
雑費	1,936,612	900,735	1,035,877
管理費	16,263,288	16,233,888	29,400
役員報酬	3,210,783	2,863,728	347,055
給料手当	3,240,000	4,182,515	▲ 942,515
会議費	1,997,338	1,904,840	92,498
交通費	3,909,822	3,371,048	538,774
通信運搬費	260,794	206,849	53,945
消耗品費	412,357	413,317	▲ 960
諸会費	239,000	199,000	40,000
光熱水道費	544,320	466,560	77,760
賃借料	409,104	740,534	▲ 331,430
諸謝金	—	—	—
監査報酬	930,000	930,000	0
雑費	1,109,770	955,497	154,273
経常費用計	181,544,000	171,312,856	10,231,144
評価損益等調整前 当期経常増減額	4,100,277	14,426,812	▲10,326,535
基本財産評価損益等	—	—	—
特定資産評価損益等	—	—	—
投資有価証券評価損益等	—	—	—
評価損益等計	—	—	—
当期経常増減額	4,100,277	14,426,812	▲10,326,535

2. 経常外増減の部			
(1) 経常外収益	—	—	—
(2) 経常外費用	—	—	—
当期経常外増減額	—	—	—
他会計振替額	—	—	—
当期一般正味財産増減額	4,100,277	14,426,812	▲10,326,535
一般正味財産期首残高	1,044,724,449	1,030,297,637	14,426,812
一般正味財産期末残高	1,048,824,726	1,044,724,449	4,100,277
Ⅱ 指定正味財産増減の部			
受取寄附金	180,000,000	180,000,000	0
一般正味財産へ振替	▲ 180,000,000	▲ 180,000,000	0
当期指定正味財産増減額	—	—	—
指定正味財産期首残高	—	—	—
指定正味財産期末残高	—	—	—
Ⅲ 正味財産期末残高	1,048,824,726	1,044,724,449	4,100,277

【経常費用の内訳】



平成27年度 選考委員会報告



精神薬療分野の助成選考経過

選考委員長 岸本 年史

平成27年度の精神薬療研究助成事業は、平成27年4月1日～平成27年6月15日の期間に募集を行い、第48回一般研究助成に96件、第9回若手研究者助成に55件及び第19回海外留学助成に8件の応募があり、応募総数は159件に達しました。昨年度と比較して、海外留学助成は減少しましたが、一般研究助成と若手研究者助成は増加しました。一般研究助成については、平成25年度より3年連続で増加しています。

本年度も昨年度と同様、10名の選考委員にて評価を実施しました。「選考要領」に基き、一般研究助成と若手研究者助成については、選考委員を各5名ずつの2グループに分け、ほぼ同数の応募書類を評価しました。また、海外留学助成については選考委員の全員が評価しました。

一般研究助成では「独創性」、「計画の妥当性」、「臨床への貢献度」について、若手研究者助成では「新規性」、「計画の妥当性」、海外留学助成では「研究実績」、「企画・発展性」についてそれぞれ評価しました。

各選考委員から送られてきた評価表は、平成27年8月28日に開封し、すべての評価が「選考要領」に則って適正に実施されていることを確認しました。

以上の書類審査の結果を踏まえ、平成27年9月12日に選考委員会を開催しました。

評価結果については、すべての助成分野において「ガイドライン」に適合しておりました。

助成対象者の除外については、該当しないものが2件、同一施設から複数件の申込みがあったものが6件あり、評価合計点の高い1件のみを審査対象としました。なお、評価点順位1位を極めて優秀な研究（助成額200万円）に選出しました。

全体的に応募された研究には優れたものが多く、甲乙つけがたいものとなりましたが、最終的には以下のような選考案を満場一致で決定しました。

- 1) 一般研究助成においては、評価点順位1位（極めて優秀）の1名に200万円、2位～24位の23名に各100万円を交付する。（応募区分1…12件・応募区分2…12件）
- 2) 若手研究者助成においては、評価点順位1位～10位の10名に各100万円を交付する。（応募区分1…7件・応募区分2…3件）
- 3) 海外留学助成は、評価点順位1位～3位の3名に各200万円を交付する。

以上の選考案を平成27年11月5日開催の理事会に答申し、原案通り可決され、平成27年度の精神薬療研究助成事業の助成金交付対象者が決定されました。なお、同一施設からの複数応募の取扱について、今後の検討課題としました。

本年度は、私が選考委員長を務めさせていただきましたが、選考委員の皆さんによる適正な評価及び公正な選考が出来ましたことを心より感謝申し上げます。

平成 27 年度 精神薬療分野の助成金受領者

■第 48 回 一般研究助成 <交付件数：24 件、助成額：2,500 万円>

【統合失調症】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	区分*	助成金額 (万円)
アレクシッチ ブランコ	名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学	統合失調症多発家系の全エクソーム解析による 病因・病態解明	1	100
岩田 仲生	藤田保健衛生大学医学部 精神神経科学講座	統合失調症の遺伝的リスク同定：GWAS データ を利用して	1	100
植木 孝俊	名古屋市立大学大学院医学研究科 統合解剖学分野	MRI による脳内ミクログリア動態解析技術の創 出と、その統合失調症予防への応用	1	100
尾関 祐二	獨協医科大学 精神神経医学講座	統合失調症患者アミノ酸代謝経路の共分散構造 分析及び次世代シーケンサーによる解析	1	100
鬼塚 俊明	九州大学大学院医学研究院 精神病態医学	精神病症状と側頭葉構造異常の関連－てんかん 性精神病の脳構造 MRI 研究	2	100
杉原 玄一	京都大学大学院医学研究科 脳病態生理学講座（精神医学）	統合失調症の脳構造異常進行のパターンとそれ に促進的・保護的に関与する因子の探索	1	100
西川 徹	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 認知行動医学系専攻 脳行動病態学講座 精神行動医学分野	統合失調症のグルタミン酸-GABA-D-セリン システムの病態解明と治療法開発	1	100
橋本 謙二	千葉大学 社会精神保健教育研究センター 病態解析研究部門	統合失調症の発症予防としての sulforaphane の 可能性	2	100
柳 雅也	近畿大学医学部 精神神経科学教室	未服薬統合失調症患者の死後脳前頭前野におけ るタンパク発現変化	1	100

【気分障害】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	区分*	助成金額 (万円)
井上 猛	東京医科大学 精神医学分野	気分障害発症に及ぼす遺伝、性格、小児期虐待、 ライフイベントの多因子相互作用	2	100
大久保善朗	日本医科大学大学院 精神行動医学分野	老年期うつ病のドーパミントランスポーターイ メージング	1	100
岡 淳一郎	東京理科大学薬学部 薬理学研究室	経鼻投与用ペプチド製剤を用いた新規うつ病治 療薬	2	100
竹林 実	呉医療センター・中国がんセンター 精神科・臨床研究部	アストロサイト中存在する G 蛋白共役型「抗う つ薬受容体」の臨床応用のための薬理学的研究	2	100
沼田 周助	徳島大学病院 精神科神経科	次世代シーケンサーを用いたうつ病の末梢白 血球のトランスクリプトーム解析	1	100
服部功太郎	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 疾病研究第三部	脳脊髄液 fibrinogen 濃度高値を示すうつ病に関 する検討	1	100
淵上 学	広島大学大学院医歯薬保健学研究院 精神神経医学講座	うつ病の神経回路病態の解明とそのリモデリン グに関わる基盤研究	2	100
古郡 規雄	弘前大学大学院医学研究科 神経精神医学講座	ヒト腸内細菌叢からアプローチするメンタルヘ ルス	1	100

溝口 義人	佐賀大学医学部 精神医学講座	神経炎症における脳神経血管機構 (NVU) の関与に着目したうつ病の病態解明	1	100
森信 繁	高知大学医学部 神経精神科学教室	GSK3 β 遺伝子のメチル化及び CNV によるうつ病・双極性障害の診断マーカー創出	2	100
山田 貴志	国際電気通信基礎技術研究所	機能的 MRI ニューロフィードバック法による新しいうつ病治療の創生	2	100

【脳器質疾患・認知症】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	区分*	助成金額 (万円)
中村 和裕	群馬大学大学院保健学研究科 生体情報検査科学	赤外自由電子レーザーを使ったアルツハイマー病モデルマウス治療	2	100

【発達障害】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	区分*	助成金額 (万円)
稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的障害研究部	発達障害の臨床症状に関する包括的疫学調査	2	100
富田 博秋	東北大学災害科学国際研究所 災害医学研究部門 災害精神医学分野	発達障害・過成長児に対するソトス症候群鑑別スクリーニング検査法の開発	2	100
前川 素子	理化学研究所 脳科学総合研究センター 分子精神科学研究チーム	頭皮の毛根細胞を用いた新規ASD診断法の開発	2	200

* 応募区分1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む）

* 応募区分2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む）

■第9回 若手研究者助成 <交付件数：10件、助成額：1,000万円>

【統合失調症】

研究者名	所属機関	研究課題	区分*	助成金額 (万円)
久島 周	名古屋大学高等研究院（医）	統合失調症のゲノムコピー数変異解析とバイオインフォマティクスを用いた分子病態研究	1	100
多田真理子	東京大学医学部附属病院 精神神経科	統合失調症早期の脳波指標開発：トランスレータブル神経生理指標の開発に向けて	1	100

【気分障害】

研究者名	所属機関	研究課題	区分*	助成金額 (万円)
多田 光宏	慶應義塾大学医学部 精神・神経科学教室	対人葛藤刺激に対する自律神経反応：新たなうつ病分類	2	100
寺石 俊也	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 疾病研究第三部	安定同位体を用いた呼気ガス検査によるうつ病のキヌレニン仮説の検討	1	100

【脳器質疾患・認知症】

研究者名	所属機関	研究課題	区分*	助成金額 (万円)
亀井 敬泰	神戸学院大学薬学部 臨床薬学部門 薬物送達システム学研究室	進行したアルツハイマー病患者の認知機能低下を改善する脳内ペプチド送達法の開発	2	100
村上 丈伸	福島県立医科大学医学部 神経内科	レビー小体型認知症は錯覚するのか？マガーク効果を用いた脳機能画像、薬物治療の検討	2	100

【発達障害】

研究者名	所属機関	研究課題	区分*	助成金額 (万円)
佐々木哲也	国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 微細構造研究部	自閉症モデル霊長類を用いた発達期シナプス刈り込み異常の検証	1	100

【その他】

研究者名	所属機関	研究課題	区分*	助成金額 (万円)
浅見 剛	横浜市立大学附属病院 精神科	パニック症における脳白質構造および局所脳機能的連絡の変化	1	100
坂口 昌徳	筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構 坂口研究室	REM 睡眠中の新生ニューロンの興奮が、トラウマ記憶の形成に必要なである	1	100
鶴身 孝介	京都大学大学院医学研究科 脳病態生理学講座（精神医学）	ギャンブル障害の安静時脳機能活動について	1	100

* 応募区分1：精神疾患の病因、病態に関連する研究（遺伝子研究を含む）

* 応募区分2：精神疾患の症状、診断、治療に関連する研究（症例研究や疫学研究を含む）

■第 19 回 海外留学助成 <交付件数：3 件、助成額：600 万円>

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
	留学先		
近藤 健治	藤田保健衛生大学医学部 精神神経科学講座	生物学的証左に裏付けられた統合失調症リスクの同定	200
	Laboratory of Neurogenetics, National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism, U.S.A.		
関口 裕孝	名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学 / 精神生物学	統合失調症死後脳を用い、同疾患のドーパミン仮説を神経組織学的に検証する	200
	The Florey Institute of Neuroscience and Mental Health at the University of Melbourne, Australia		
吉池 卓也	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 成人精神保健研究部	グルタミン酸作動薬による覚醒療法の抗うつ作用増強 効果の検討	200
	Department of Clinical Neurosciences, Scientific Institute and University Vita-Salute San Raffaele, Italy		



血液医学分野の助成選考経過

選考委員長 安藤 潔

平成27年度の血液医学分野の研究助成事業は、平成27年4月1日（水）～平成27年6月15日（月）の期間で募集を行いました。平成27年度より「血液、血管に関連する再生医学」を第1グループに入れ、第2グループは「感染、免疫、アレルギーとその関連領域」のみとなりました。第34回一般研究助成に110件（第1グループ50件・第2グループ60件）、第17回若手研究者助成に62件（第1グループ26件・第2グループ36件）及び第33回海外留学助成に7件の応募をいただき、応募総数は179件となりました。昨年度と比較すると、応募総数では31件増加しました。内訳をみますと、海外留学助成は6件減少しましたが、一般研究助成と若手研究者助成はそれぞれ23件、14件と大幅に増加しました。

本年度も従来通り、一般研究助成と若手研究者助成については、2グループ5名ずつの選考委員にて評価を行いました。また、海外留学助成については選考委員全員で行いました。

一般研究助成においては「独創性」、「計画の妥当性」及び「臨床への貢献度」について、若手研究者助成においては「新規性」と「計画の妥当性」について、海外留学助成においては「研究実績」と「企画・発展性」について、各項目別に評価を行いました。

各選考委員から送付された評価表は、平成27年8月27日（木）に開封し、すべての評価表が「選考要領」に則って適正に作成されていることを確認しました。

平成27年9月26日（土）に選考委員会を開催し、審査を行いました。

同一施設から複数件の申込みがあったものが6件（一般研究助成3件・若手研究者助成3件）あり、評価合計点の高い1件のみを審査対象としました。また今回は、応募件数のすべてが当財団の助成対象に該当していました。さらに、昨年に続き、極めて優秀な研究を選出しました。

最終的には次の選考案を満場一致で決定しました。

- 1) 一般研究助成においては、評価点順位1位（極めて優秀）の1名に200万円、2位～24位の23名に各100万円を交付する。（第1グループ11件・第2グループ13件）
- 2) 若手研究者助成においては、評価点順位1位～8位（8位は3名）の10名に各100万円を交付する。（第1グループ3件・第2グループ7件）
- 3) 海外留学助成では、評価点順位1位～3位の3名に各200万円を交付する。

上記の選考案を平成27年11月5日（木）開催の理事会に諮り、原案通り可決され、平成27年度の血液医学研究助成事業の助成金交付対象者が決定されました。

平成27年度も、選考委員の皆さんによる適正な評価及び公正な選考が出来ましたことを心より感謝申し上げます。

本年度は、一般研究助成及び若手研究者助成の応募が昨年度と比べ大きく伸長しましたが、海外留学助成の方は低迷しております。来年度におきましては特に、海外留学助成に多くの応募があることを祈念いたします。

平成 27 年度 血液医学分野の助成金受領者

■第 34 回 一般研究助成 <交付件数：24 件、助成額：2,500 万円>

【血栓止血・血管機能（各種臓器の生理、病態など）とその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
池添 隆之	高知大学医学部 血液・呼吸器内科	新規トロンボモジュリン変異体を用いた血管内皮細胞保護薬の開発	100
後藤 信哉	東海大学医学部 内科学系 循環器内科学 東海大学大学院医学研究科 代謝疾患研究センター	血小板細胞接着に寄与する糖蛋白 GPIb α と von Willebrand 因子の分子間力 in silico 予測と原子間力顕微鏡検証	100
山下 篤	宮崎大学医学部 病理学講座 構造機能病態学分野	トリプトファン代謝を介した動脈硬化巣の炎症および血栓性の制御	100

【輸血・細胞療法とその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
加藤 光次	九州大学病院 血液・腫瘍内科	移植片対宿主病による不妊メカニズムの解明	100
佐竹 敦志	関西医科大学 内科学第一講座	遺伝子組換えトロンボモジュリンによる同種造血幹細胞移植後免疫反応の制御機構の解明	100
高松 博幸	金沢大学医薬保健研究域 医学系 細胞移植学（血液・呼吸器内科）	抗 HLA 抗体陽性患者リンパ球を用いた抗 HLA モノクローナル抗体の作製	100

【血液・血管に関連する再生医学】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
小野澤真弘	北海道大学大学院医学研究科 血液内科	ゲノム切断点同定による AML1-ETO 陽性急性白血病の予後解析と転座メカニズムの解明	100
杉本 智恵	北海道大学大学院医学研究科 衛生学・細胞予防医学分野	ヒト自然免疫型 T 細胞の大量産生の試み	100
高橋 淑子	京都大学大学院理学研究科 生物科学専攻 動物学教室 動物発生学専攻	血管再生医学に向けた血管リモデリングの制御機構の解析	100
森田 林平	慶應義塾大学医学部 微生物学・免疫学	ETV2 による血管内皮細胞へのリプログラム分子機序の解明	100
横田 貴史	大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科学	クロマチン制御分子 SATB1 による造血幹細胞の分化調節機構の解明	100

【感染・免疫・アレルギーとその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
石山 謙	金沢大学附属病院 血液内科	KIR- リガンド欠失血球における NK 細胞抵抗性機構の解明	100
菅井 学	福井大学医学部 生命情報医科学講座 分子遺伝学領域	活性化 B 細胞分化制御による免疫反応調製機構の解析	100
高橋 秀尚	北海道大学大学院医学研究科 医学専攻 生化学講座 医化学分野	新規転写伸長制御因子 Med26 の混合型急性白血病との関わりについての解析	100

田中 康雄	東京大学医学部附属病院 消化器内科	B 型肝炎ウイルス複製におけるエピジェネティクス制御機構の解明と新規治療法の開発	100
竹馬 俊介	慶應義塾大学医学部 微生物学免疫学教室	クロマチン制御因子 TRIM28 による T 細胞性自己免疫疾患の制御機構	100
南保明日香	北海道大学大学院医学研究科 生理学講座 細胞生理学分野	Epstein-Barr ウイルス関連リンパ腫におけるエキソソームの機能解析	100
西田 圭吾	鈴鹿医療科学大学薬学部 薬学科 免疫制御学研究室	亜鉛シグナルによる炎症反応制御機構の解明	100
西村 順裕	国立感染症研究所 ウイルス第二部	手足口病ウイルスが樹状細胞に惹起するサイトカイン産生シグナルの解明	100
馬場 義裕	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 分化制御研究室	炎症抑制性 B 細胞の分化機構の解明	100
福井 宣規	九州大学生体防御医学研究所 個体機能制御学部門 免疫遺伝学分野	自然リンパ球の発生・分化における DOCK8 の役割とその制御機構の解明	200
前川 洋一	岐阜大学大学院医学系研究科 分子・構造学講座 寄生虫学・感染学分野	メモリー T 細胞 Notch シグナルに着眼した免疫難病の病態理解と治療法の確立	100
丸 義朗	東京女子医科大学医学部 薬理学教室	がん転移を抑制する自然免疫阻害薬の開発研究	100
安永純一郎	京都大学ウイルス研究所 附属ヒトレトロウイルス 研究施設 ウイルス制御研究領域	HBZ により誘導される共抑制分子 TIGIT 発現の意義と治療戦略	100

■第 17 回 若手研究者助成 <交付件数：10 件、助成額：1,000 万円>

【血栓止血・血管機能（各種臓器の生理、病態など）とその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
清水 逸平	新潟大学大学院医歯学総合研究科 先進老化制御学講座	血液凝固第 Xa 因子による褐色脂肪不全を介した新たな糖尿病発症機序の解明	100

【血液・血管に関連する再生医学】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
梅本 晃正	熊本大学 国際先端医学研究機構 須田研究室	Integrin $\alpha v \beta 3$ の双方向的な造血幹細胞活性制御における方向性決定機構	100
木戸屋浩康	大阪大学微生物病研究所 情報伝達分野	動脈・静脈間の相互作用が制御する、血管分化メカニズムの解明	100

【感染・免疫・アレルギーとその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
生島 弘彬	東京大学生産技術研究所 炎症免疫制御学	対癌ロバストネスの基盤としての自然免疫応答惹起機構の解明と応用	100
木村 俊介	北海道大学大学院医学研究科 解剖学講座 組織細胞学分野	RANKL-RANK-OPG による腸上皮バリア維持と破綻による腸炎発症機構の解明	100
桐野 洋平	横浜市立大学大学院医学研究科 病態免疫制御内科学	膠原病における全エキソームシーケンスを用いた病態の解明	100
鈴木 一博	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 免疫応答ダイナミクス研究室	交感神経によるリンパ球動態の概日リズム制御とその意義の解明	100
人見 祐基	東京大学大学院医学系研究科 国際保健学専攻 人類遺伝学教室	自己免疫性肝疾患のオーダーメイド医療を目指した post-GWAS 解析	100
村松 秀城	名古屋大学医学部附属病院 小児科	原発性免疫不全症候群の網羅的迅速遺伝子診断システムの開発	100
吉崎 歩	東京大学大学院医学系研究科・医学部 皮膚科	抗原特異的制御性 B 細胞が持つ自己免疫疾患に対する免疫制御機能に関する検討	100

■第 33 回 海外留学助成 <交付件数：3 件、助成額：600 万円>

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
	留学先		
河野 通仁	北海道大学大学院医学研究科 免疫・代謝内科学分野	全身性エリテマトーデスにおける T 細胞サイクリック AMP 応答配列調節因子の病態関与	200
	Beth Israel Deaconess Medical Center, Harvard Medical School Division of Rheumatology, U.S.A.		
松本 寿健	大阪大学附属病院高度救命センター 救急医学教室	転写調整因子 HIVEP1 を標的とした敗血症における NF κ B シグナルのメカニズム解明	200
	Academic Medical Center, University of Amsterdam, Center of Experimental and Molecular Medicine, the Netherlands		
和田 剛志	北海道大学大学院医学研究科 侵襲制御医学講座 救急医学分野	補体系が関与する生体侵襲下臓器障害の病態解明とそ の治療体系の確立	200
	Boston University School of Medicine, Pathology & Laboratory Medicine, U.S.A.		



循環医学分野の助成選考経過

選考委員長 小川 久雄

平成27年度循環医学分野研究助成の募集は、例年と同様に平成27年4月1日から6月15日までの期間に行いました。全体では、応募総数167件で、昨年度と比べると大幅に増加（昨年度121件）しましたが、ほぼ従来通りの応募数となりました。それぞれの助成対象別では、一般研究助成には91件（第1グループ：脳血管障害及びその関連研究23件、第2グループ：心疾患及びその関連研究68件）であり、第2グループが大幅に増加いたしました。若手研究者助成には63件（第1グループ：25件、第2グループ：38件）と、こちらは第1グループで増加がみられました。また、海外留学助成は13件の申込みがあり、ほぼ例年並みの応募状況でありました。グループ別の今年度応募比率は、約3:7と第2グループの応募が多くなっています。

脳血管障害と心疾患それぞれの研究領域で各5名の選考委員が分担して、応募書類の評価を行いました。一般研究助成においては、＜独創性＞、＜計画の妥当性＞及び＜臨床への貢献度＞、若手研究者助成では、＜新規性＞と＜計画の妥当性＞、海外留学助成では、＜研究実績＞と＜企画・発展性＞の項目に分けて、それぞれ評価しました。

選考委員によって評価され、厳封下事務局へ送付された評価表は、8月24日（月）私の立会いの下で開封作業を行い、全ての評価表が選考要領に則って適正に作成されていることを確認しました。

以上の確認作業を終え、9月19日（土）に選考委員会を開催し、審議を行いました。初めに評価ならびに集計結果、候補者の資格等について確認されました。「評価基準」は委員の評価がほぼガイドラインに沿った評価であり、概ね妥当でありました。「助成対象者の除外」では、本財団の助成対象者に該当しないと判断した委員は、おられませんでした。同一施設から複数の申込みは、一般研究助成では4施設から10件、若手研究者助成では5施設から15件確認されました。選考要領第16条第2項に則り、さらに選考委員全員の賛同のもとに、それぞれの施設において評価点の高い1件のみを対象とし、審議いたしました。一般研究助成につきましては、「極めて優秀な研究」の候補者についても議論いたしましたが、本年度は見送ることになりました。また、第1グループと第2グループ間で評価合計点に有意差がないことを確認しました。海外留学助成においては、日本学術振興会海外特別研究員に内定のため、応募辞退があり、この1件を集計対象から外しました。最終的には満場一致で、以下のような助成金交付案といたしました。

- 1) 一般研究助成においては、評価点順位の高い上位24名に各100万円を交付する。
＜第1グループ：6件、第2グループ：18件＞
- 2) 若手研究者助成においては、評価点順位の高い上位10名に各100万円を交付する。
＜第1グループ：3件、第2グループ：7件＞
- 3) 海外留学助成は、評価点順位の高い上位3名に各200万円を交付する。

以上の助成金交付選考案を11月5日（木）の理事会に答申した結果、原案どおりに承認され、平成27年度助成金交付対象者が決定しました。来年度は、さらに多数の優れた研究の応募があることを祈念しております。

平成 27 年度 循環医学分野の助成金受領者

■ 第 14 回 一般研究助成 <交付件数：24 件、助成額：2,400 万円>

【脳血管障害及びその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
鏡谷 武雄	北海道大学病院 脳神経外科	人工酸素運搬体 HemoAct を用いた新規脳梗塞治療法の開発	100
猪原 匡史	国立循環器病研究センター 脳神経内科	口腔内細菌に起因する新たな脳卒中の病態機序の解明	100
上野 育子	岩手医科大学医歯薬総合研究所 超高磁場 MRI 診断・病態研究部門	7 テスラ MRI を用いた慢性脳虚血に対する無侵襲脳酸素摂取率計測法の開発	100
黒田 淳哉	九州大学大学院医学研究院 病態機能内科学	脂肪組織由来間葉系幹細胞を用いた脳梗塞治療とそのメカニズムの検討	100
鈴木 秀謙	三重大学大学院医学系研究科 臨床医学系講座 脳神経外科	テネイシン C を標的としたくも膜下出血後脳損傷に対する治療法開発のための基礎的研究	100
渡邊 正知	福山大学薬学部 薬理学研究室	脳虚血耐性現象における SUMO 化修飾機構の役割に関する研究	100

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
家田 真樹	慶應義塾大学医学部 循環器内科	安全かつ効率の良い心筋直接リプログラミングによる心臓再生法の開発	100
尾池 雄一	熊本大学大学院生命科学研究部 分子遺伝学分野	心臓特異的 long non-coding RNA による心肥大・心不全の病態制御	100
奥村 敏	鶴見大学歯学部 生理学講座	軟食嗜好による咀嚼機能障害と心疾患発症との関連性	100
尾野 亘	京都大学大学院医学研究科 循環器内科学	ノンコーディング RNA の動脈硬化における機能の解明	100
小尾 正太郎	獨協医科大学 研究支援センター	伸展刺激による心臓線維芽細胞の分化制御機構の解明	100
川原 敦雄	山梨大学大学院総合研究部 医学教育センター発生生物学	心臓形成における長鎖ノンコーディング RNA の機能	100
岸 拓弥	九州大学 循環器病未来医療研究センター 未来心血管治療学共同研究部門	脳内神経グリア関連異常による循環動態恒常性維持機能不全の解明	100
倉林 正彦	群馬大学大学院医学系研究科 臓器病態内科学	血管平滑筋細胞のエネルギー代謝経路を標的とする新規の動脈硬化治療戦略	100
小柴 和子	東京大学 分子細胞生物科学研究所 心循環器再生研究分野	心臓細胞運命転換に関わる ECM の機能	100
小室 一成	東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学	次世代シーケンズ技術と iPS 細胞技術を活用した心不全の個別化医療の確立	100
佐藤 公雄	東北大学病院 循環器内科 臨床医学開発室	臨床検体を用いたバイオマーカー創出とその分子標的機構に基づく創薬シーズ同定	100
新藤 隆行	信州大学大学院医学系研究科 循環器病態学講座	臓器間連携と恒常性を司る、新たな生理活性因子情報制御システムの解明と応用	100

高成 広起	大分大学医学部 病態生理学講座	新しい特異的 I_{K1} 阻害薬の臨床応用に向けた抗不整脈メカニズムの基礎的研究	100
辻 幸臣	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 医学系分子生理学	心室細動ストームの成立に関わる細胞内シグナル CaMKII の電気生理学的役割	100
中山 晋介	名古屋大学大学院医学系研究科 細胞情報医学専攻 細胞生理学	アモルファスメタル磁気計測器による心筋組織興奮伝 搬の非侵襲的評価	100
東 幸仁	広島大学 原爆放射線医科学研究所 ゲノム障害医学研究センター ゲノム障害病理研究分野 再生医科学部門	内皮型一酸化窒素合成酵素制御における新規レジスチ ン様分子の役割の解明	100
堀江 稔	滋賀医科大学 内科学講座 循環器・呼吸器	遺伝性不整脈の日本人コホートにおける遺伝的背景と発症 メカニズムの検討	100
山下 智也	神戸大学医学部附属病院 循環器内科	冠動脈疾患発症に関連する腸内細菌叢の調査研究とそ の成果の臨床応用	100

■ 第 14 回 若手研究者助成 <交付件数：10 件、助成額：1,000 万円>

【脳血管障害及びその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
譚 成博	北海道大学大学院医学研究科 神経病態学講座 脳神経外科学分野	脳梗塞に対する細胞治療研究－TSPO-PET による神経炎症抑制作用の評価	100
宮崎 雄一	国立循環器病研究センター 脳血管内科	塞栓源不明脳梗塞患者に対する 7 日間連続ホルター心電図を用いた心房細動検出の有用性	100
山岸 覚	浜松医科大学 解剖学講座 神経機能学分野	新規ガイダンス因子による神経新生・血管新生を組み合わせた脳梗塞再生法の開発	100

【心疾患及びその関連領域】

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
遠山 周吾	慶應義塾大学医学部 循環器内科	microRNA を用いたヒト多能性幹細胞由来成熟心筋細胞の作製と臨床応用	100
仲矢 道雄	九州大学大学院薬学研究院 薬効安全性学分野	心肥大時における MFG-E8 の役割解明	100
野村征太郎	東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学	時空間的 1 細胞トランスクリプトーム解析による心不全における心臓細胞挙動の一斉同定	100
原 哲也	神戸大学大学院医学研究科 内科学講座 循環器内科学分野	新規の血管内皮接着因子、JCAD の冠動脈疾患発症に及ぼす影響の解明	100
福井 一	国立循環器病研究センター研究所 細胞生物学部	一次繊毛を介した心外膜腔内流れストレス受容による心臓発生制御機構	100
堀江 貴裕	京都大学大学院医学研究科 循環器内科学	ノンコーディング RNA を介した新規 NASH 診断法・治療法の開発	100
宮岡佑一郎	東京都医学総合研究所 生体分子先端研究分野 幹細胞プロジェクト	遺伝子改変ヒト iPS 細胞の作製による心筋症発症機序の解析	100

■ 第 10 回 海外留学助成 <交付件数：3 件、助成額：600 万円>

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
	留学先		
刀坂 泰史	静岡県立大学薬学部 分子病態学分野	SFRP5/Wnt5a 経路を介した心筋梗塞後リモデリング 機構の解析	200
	Whitaker Cardiovascular Institute, Molecular Cardiology, Boston University School of Medicine, U.S.A.		
橋本 良太	順天堂大学医学部 生理学第二講座	肺高血圧症で増加する CD133 陽性幹細胞を病態改善に 働かせるための方法を見出す	200
	Department of Pharmacology, New York Medical College, U.S.A.		
吉村 壮平	国立循環器病研究センター 脳血管内科	急性期脳梗塞への再開通療法後の頭蓋内出血性合併症 発症に関与する因子の検討	200
	Neurological and Mental Health Division, the George Institute for Global Health, University of Sydney, Australia		



特定研究助成の選考経過

選考委員長 武田 雅俊

平成27年度は、特定研究助成事業を開始して10周年を記念し、2件（総額2,000万円、研究課題は特定せず）の募集を行いました。平成27年7月1日（水）～8月31日（月）の募集期間に、45件の応募をいただきました。研究分野は、従来通り「循環医学」が最も多く23件、「精神薬療」13件、「血液医学」9件でした。また、研究形態別に見ますと、「共通テーマ型」が多かったことは前年までと変わりありませんでしたが、「共通テーマかつ共同研究」も増えておりました。

9名の選考委員（精神 3名、血液 3名、循環 3名）が、以下の項目について評価しました。評価項目1：＜計画の妥当性＞、＜独創性＞、＜臨床への貢献度＞についてはガイドラインに沿った3段階の相対評価、評価項目2：＜研究課題の適合性＞、＜分野間の共通性・共同性＞については3段階の絶対評価を行いました。これらの評価結果を総合的に判断し、各選考委員から2名ずつの候補者を推薦していただきました。

各選考委員から送付された評価表は、平成27年9月30日（水）に私の立会いのもとに開封し、以下の事項を確認しました。

【確認】

- ・評価基準は委員の評価がほぼガイドラインに沿った形となっていた。
- ・本財団の研究対象に該当しないと判断された申込みはなかった。
- ・選考委員が「分担研究者」「直接指導者」に該当した研究がそれぞれ1件ずつあったが、その選考委員は評価を行っていなかった。
- ・評価表には2名の候補者名が明記されていた。

それぞれの評価表が適正であることを受け、選考委員会を平成27年10月7日（水）に開催しました。推薦された候補者は、重複も含め15名でした。出席委員全員の同意のもと、推薦された候補者について評価点及び研究内容を審査することとしました。まず「A」評価の数を考慮して審議することとなり、15件から10件まで絞られ、さらに推薦された選考委員からの説明をもとに議論を重ね、8件となりました。その議論も尽くされたことから最終的には投票を行い、得票の多かった候補3名に絞られ、さらに決選投票を行うことで2名の候補者を決定しました。

◇◇最終選考に残った2名に1,000万円を交付する（2年分割）◇◇

以上の選考案を11月5日（木）の理事会にて審議した結果、原案どおり可決され、平成27年度の特定研究助成事業の助成金交付対象者が決定されました。

本年度は、特定研究助成10周年として2件助成いたしました。受領された先生方には、素晴らしい研究成果をあげられることを期待しております。選考委員会の議論は、長時間に及ぶ白熱したものになりました。ご多忙の中、ご尽力いただきました選考委員の先生方には心より御礼申し上げます。来年度も、質の高い多数の応募があることを祈念しております。

平成 27 年度 特定研究助成の助成金受領者

■ 第 10 回 特定研究助成 <交付件数：2 件、助成額：2,000 万円>

研究者名	所 属 機 関	研 究 課 題	助成金額 (万円)
堀内 久徳	東北大学加齢医学研究所 加齢制御研究部門 基礎加齢研究分野	循環器疾患に伴う後天性フォンウィルブランド症候群 の実態解明	1,000
南野 徹	新潟大学大学院医歯学総合研究科 循環器内科学	血管ニッチにおける老化シグナルを介した組織幹細胞 不全発症機序の解明	1,000



エナガ

第48回 精神神経系薬物治療研究報告会

当財団の精神薬療分野の平成26年度助成金受領者に研究成果を報告していただく、第48回精神神経系薬物治療研究報告会を平成27年12月4日（金）に千里ライフサイエンスセンター（大阪）で開催いたしました。

今回は、一般研究助成金受領者24名、若手研究者助成金受領者10名の中から口演発表8題、ポスター発表22題、及び国際医療福祉大学病院教授の三國雅彦先生による特別講演がありました。

強風による交通機関の乱れにより、当日発表できなかった方もおられましたが、発表者・共同研究者及び財団関係者並びに聴講の方々を合わせて約70名の参加がありました。

研究報告会の開会にあたり当財団の村松実理事長より挨拶があり、精神薬療分野における助成の目的やこの研究報告会の特徴、期待を述べられました。



村松実理事長 挨拶



口演会場

口演発表では、尾崎紀夫先生（評議員）を座長に統合失調症関連、気分障害関連、うつ病関連、認知症関連が各1題ずつ発表されました。



座長：尾崎紀夫先生



演者：鳥塚通弘先生
（奈良県立医科大学）



演者：扇谷昌宏先生
（九州大学）



演者：小川真太郎先生
（国立精神・神経医療
研究センター）



演者：松村律子先生
（山口大学）

さらに座長を武田雅俊先生（理事）に交代し、統合失調症関連2題、抗精神病薬関連1題、認知症関連1題、が発表されました。



座長：武田雅俊先生



演者：太田深秀先生
（国立精神・神経医療
研究センター）



演者：木下誠先生
（徳島大学）



演者：坂寄健先生
（日本医科大学）



演者：西尾慶之先生
（東北大学）

特別講演は、樋口輝彦先生（理事）に座長をお願いし、三國雅彦先生（理事）に「うつ病の診断補助バイオマーカー」というタイトルでご講演を頂きました。

三國先生は初めにうつ病の診断の精緻化を図ると同時に患者本人や家族に症状の重症度の客観的な情報を提供する観点から、診断補助マーカーの重要性を述べられました。

具体的な診断補助マーカーとしてPETによる脳画像、近赤外線スペクトロスコピーを用いた研究を紹介されました。さらに分子遺伝学的手法により、若年発症うつ病と中高年発症うつ病の白血球に発現するmRNA量を比較し、うつ状態依存的な遺伝子群（CIDEA、SLC36A1、RNS1、STYXL1）を見出したこと、中でもCIDEAは、うつ状態との感受性や特異性が非常に高いという研究成果を紹介されました。今後も研究者としてうつ病の診断補助マーカーの研究を継続したいとの抱負を述べられ講演を終了されました。



座長：樋口輝彦先生



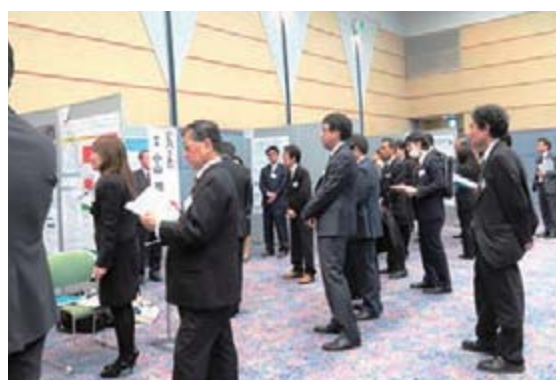
演者：三國雅彦先生

特別講演に続いて5パートに分かれてポスター発表が行われました。岸本年史先生（選考委員）、白川治先生（評議員）、小山司先生（理事）、篠崎和弘先生（前選考委員）、松永寿人先生（選考委員）に座長をお願いいたしました。

統合失調症、気分障害、認知症、発達障害等の病態解明や診断法、新規治療法の開発をテーマに分子遺伝学的手法、生化学的手法、生理学的手法、脳画像等を用いた発表があり、また活発な討議が行われました。口演、ポスター発表を通じて、今回は気分障害関連の研究発表が多かったことと、発達障害関連の研究発表が増加したことが印象的でした。



ポスター会場



ポスター会場

助成研究の成果

発 表 論 文

研究助成を受けられた研究者より平成27年4月～平成28年3月に報告された発表論文は次のとおりです。

- | | |
|-------|--|
| 氏名、所属 | 三輪 秀樹 群馬大学大学院医学系研究科 遺伝発達行動学 |
| 助成区分 | 第3回 精神薬療分野 萌芽研究助成 |
| 研究課題 | 「Two-hit 仮説」に基づく統合失調症モデルマウス |
| 論文 | Glutamate decarboxylase 67 deficiency in a subset of GABAergic neurons induces schizophrenia-related phenotypes
Fujihara K, Miwa H, Kakizaki T, Kaneko R, Mikuni M, Tanahira C, Tamamaki N, Yanagawa Y
Neuropsychopharmacology 40: 2475-2486, 2015 |
| | |
| 氏名、所属 | 仲嶋 一範 慶應義塾大学医学部 解剖学教室 |
| 助成区分 | 第47回 精神薬療分野 一般研究助成 |
| 研究課題 | 統合失調症様症状の発症予防に関わる抑制性神経細胞の分化制御機構の解明 |
| 論文 | 1) Reelin has a preventive effect on phencyclidine-induced cognitive and sensory-motor gating deficits
Ishii K, Nagai T, Hirota Y, Noda M, Nabeshima T, Yamada K, Kubo K, Nakajima K
Neuroscience Research 96: 30-36, 2015
2) The COUP-TFII/Neuropilin-2 is a molecular switch steering diencephalon-derived GABAergic neurons in the developing mouse brain
Kanatani S, Honda T, Aramaki M, Hayashi K, Kubo K, Ishida M, Tanaka D, Kawauchi T, Sekine K, Kusuzawa S, Kawasaki T, Hirata T, Tabata H, Uhlén P, Nakajima K
Proc Natl Acad Sci U S A. 112: E4985-94, 2015 |
| | |
| 氏名、所属 | 前川 素子 理化学研究所 脳科学総合研究センター 分子精神科学研究チーム |
| 助成区分 | 第47回 精神薬療分野 一般研究助成 |
| 研究課題 | 脂肪細胞由来分子による ASD 病態形成メカニズムの解明 |
| 論文 | Investigation of the fatty acid transporter-encoding genes <i>SLC27A3</i> and <i>SLC27A4</i> in autism
Maekawa M, Iwayama Y, Ohnishi T, Toyoshima M, Shimamoto C, Hisano Y, Toyota T, Balan S, Matsuzaki H, Iwata Y, Takagai S, Yamada K, Ota M, Fukuchi S, Okada Y, Akamatsu W, Tsujii M, Kojima N, Owada Y, Okano H, Mori N, Yoshikawa T
Sci Rep. 5: 16239, 2015 |
| | |
| 氏名、所属 | 芦原 英司 京都薬科大学 病態生理学分野 |
| 助成区分 | 第26回 血液医学分野 一般研究助成 |
| 研究課題 | γ δ T細胞の抗原認識機序の解明と γ δ T細胞遊走誘引物質の同定 |
| 論文 | Isopentenyl pyrophosphate secreted from Zoledronate-stimulated myeloma cells, activates the chemotaxis of γ δ T cells
Ashihara E, Munaka T, Kimura S, Nakagawa S, Nakagawa Y, Kanai M, Hirai H, Abe H, Miida T, Yamato S, Shoji S, Maekawa T
Biochem Biophys Res Commun. 463: 650-5, 2015 |

氏名、所属 福井 竜太郎 東京大学医科学研究所 感染遺伝学分野
 助成区分 第14回 血液医学分野 若手研究者助成
 研究課題 核酸認識系 Toll-like receptor の応答性を制御する新規分子の探索
 論文 1) DNase II-dependent DNA digestion is required for DNA sensing by TLR9
 Chan MP, Onji M, Fukui R, Kawane K, Shibata T, Saitoh S, Ohto U, Shimizu T, Barber GN, Miyake K
 Nat Commun. 6: 5853, 2015
 2) Type I IFN contributes to the phenotype of *Unc93b1*^{D34A/D34A} mice by regulating TLR7 expression in B cells and dendritic cells
 Fukui R, Kanno A, Miyake K
 J Immunol. 196 :416-27, 2016

氏名、所属 大友 耕太郎 北海道大学大学院医学研究科 免疫・代謝内科学分野
 助成区分 第31回 血液医学分野 海外留学助成
 研究課題 T細胞受容体 CD3ζ鎖ノックアウトマウスを用いた自己免疫病態の解明に資する研究
 論文 Cutting Edge: Nanogel-based delivery of an inhibitor of CaMK4 to CD4⁺ T cells suppresses experimental autoimmune encephalomyelitis and lupus-like disease in mice
 Otomo K, Koga T, Mizui M, Yoshida N, Kriegel C, Bickerton S, Fahmy TM, Tsokos GC
 J Immunol. 195: 5533-7, 2015

氏名、所属 鈴 伸也 熊本大学エイズ学研究センター 国際先端医学研究拠点施設
 助成区分 鈴プロジェクト研究室
 研究課題 第33回 血液医学分野 一般研究助成
 論文 新たな血液細胞 fibrocytes: その起源と HIV 感染における意義の解明
 Fibrocytes differ from macrophages but can be infected with HIV-1
 Hashimoto M, Nasser H, Bhuyan F, Kuse N, Satou Y, Harada S, Yoshimura K, Sakuragi J, Monde K, Maeda Y, Welbourn S, Strebel K, Abd El-Wahab EW, Miyazaki M, Hattori S, Chutiwitoonchai N, Hiyoshi M, Oka S, Takiguchi M, Suzu S
 J Immunol. 195: 4341-50, 2015

氏名、所属 宗 孝紀 東北大学大学院医学系研究科 病理病態学講座 免疫学分野
 助成区分 第33回 血液医学分野 一般研究助成
 研究課題 T細胞補助刺激レセプターが構築する分子複合体と自己免疫疾患制御
 論文 TNF receptor-associated factor (TRAF) signaling network in CD4⁺ T-lymphocytes
 So T, Nagashima H, Ishii N
 Tohoku J Exp Med. 236: 139-54, 2015

氏名、所属	徳原 大介 大阪市立大学大学院医学研究科 発達小児医学
助成区分	第33回 血液医学分野 一般研究助成
研究課題	臍帯血を用いた自然免疫応答の解明を基盤とした新生児ワクチンの開発
論文	Zymosan induces immune responses comparable with those of adults in monocytes, dendritic cells, and monocyte-derived dendritic cells from cord blood Nohmi K, Tokuhara D, Tachibana D, Saito M, Sakashita Y, Nakano A, Terada H, Katayama H, Koyama M, Shintaku H J Pediatr. 167: 155-62, 2015
氏名、所属	丸山 健太 大阪大学免疫学フロンティア研究センター
助成区分	第16回 血液医学分野 若手研究者助成
研究課題	骨免疫神経系制御因子による関節リウマチ病態形成メカニズムの解明
論文	1) 5-Azacytidine-induced protein 2 (AZI2) regulates bone mass by fine-tuning osteoclast survival Maruyama K, Fukasaka M, Uematsu S, Takeuchi O, Kondo T, Saitoh T, Martino MM, Akira S J Biol Chem. 290: 9377-86, 2015 2) Emerging molecules in the interface between skeletal system and innate immunity Maruyama K, Akira S Pharmacol Res. 99: 223-8, 2015
氏名、所属	南野 徹 新潟大学大学院医歯学総合研究科 循環器学分野
助成区分	第9回 循環医学分野 一般研究助成
研究課題	老化分子 p53 を標的とした心不全治療の開発
論文	p53-Induced inflammation exacerbates cardiac dysfunction during pressure overload Yoshida Y, Shimizu I, Katsuumi G, Jiao S, Suda M, Hayashi Y, Minamino T J Mol Cell Cardiol. 85: 183-98, 2015
氏名、所属	力武 良行 神戸薬科大学 医療薬学研究室
助成区分	第11回 循環医学分野 一般研究助成
研究課題	動脈硬化（内膜肥厚）の形成と石灰化への進展の制御機構
論文	The cell adhesion molecule Necl-4/CADM4 serves as a novel regulator for contact inhibition of cell movement and proliferation Yamana S, Tokiyama A, Mizutani K, Hirata K, Takai Y, Rikitake Y PLoS One. 10: e0124259, 2015
氏名、所属	猪原 匡史 国立循環器病研究センター 脳神経内科
助成区分	第12回 循環医学分野 一般研究助成
研究課題	長寿遺伝子 Sirt1 による脳虚血抵抗性獲得機序の解明とその臨床応用
論文	SIRT1 attenuates severe ischemic damage by preserving cerebral blood flow Hattori Y, Okamoto Y, Nagatsuka K, Takahashi R, Kalaria RN, Kinoshita M, Ihara M Neuroreport. 26: 113-7, 2015

- 氏名、所属 日和佐 隆樹 千葉大学大学院医学研究院 遺伝子生化学
 助成区分 第12回 循環医学分野 一般研究助成
 研究課題 脳梗塞患者血清に特異的に検出される抗体の同定
 論文 Identification of cerebral infarction-specific antibody markers from autoantibodies detected in patients with systemic lupus erythematosus
 Goto K, Sugiyama T, Matsumura R, Zhang XM, Kimura R, Taira A, Arita E, Iwase K, Kobayashi E, Iwadata Y, Saeki N, Mori M, Uzawa A, Muto M, Kuwabara S, Takemoto M, Kobayashi K, Kawamura H, Ishibashi R, Sakurai K, Fujimoto M, Yokote K, Nakayama T, Harada J, Kobayashi Y, Ohno M, Chin H, Nishi E, Machida T, Iwata Y, Mine S, Kamitsukasa I, Wada T, Aotsuka A, Katayama K, Kikkawa Y, Sunami K, Takizawa H, Nakamura R, Tomiyoshi G, Shinmen N, Kuroda H, Hiwasa T
 J Mol Biomark Diagn. 6: 2, 2015
- 氏名、所属 細田 弘吉 神戸大学大学院医学研究科 脳神経外科学分野
 助成区分 第13回 循環医学分野 一般研究助成
 研究課題 脳梗塞における代謝変化のメタボロミクス包括的解析と新たな脳虚血バイオマーカー探索
 論文 1) The significance of cerebral hemodynamics imaging in carotid endarterectomy: A Brief Review
 Hosoda K
 Neurol Med Chir (Tokyo). 55: 782-8, 2015
 2) Long-term outcomes of carotid endarterectomy and carotid artery stenting for carotid artery stenosis: Real-world status in Japan
 Imahori T, Hosoda K, Fujita A, Yamamoto Y, Mizowaki T, Miyake S, Kimura H, Kohta M, Kohmura E
 J Stroke Cerebrovasc Dis. 25: 360-7, 2016
- 氏名、所属 涌井 広道 横浜市立大学大学院医学研究科 病態制御内科学
 助成区分 第13回 循環医学分野 若手研究者助成
 研究課題 受容体結合型脳血管障害抑制因子に着目した認知症の病態解明および病態制御の試み
 論文 1) Effects of pitavastatin add-on therapy on chronic kidney disease with albuminuria and dyslipidemia
 Ohsawa M, Tamura K, Wakui H, Kanaoka T, Azushima K, Uneda K, Haku S, Kobayashi R, Ohki K, Haruhara K, Kinguchi S, Toya Y, Umemura S
 Lipids Health Dis. 14: 161, 2015
 2) Renal tubule angiotensin II type 1 receptor-associated protein promotes natriuresis and inhibits salt-sensitive blood pressure elevation
 Wakui H, Uneda K, Tamura K, Ohsawa M, Azushima K, Kobayashi R, Ohki K, Dejima T, Kanaoka T, Tsurumi-Ikeya Y, Matsuda M, Haruhara K, Nishiyama A, Yabana M, Fujikawa T, Yamashita A, Umemura S
 J Am Heart Assoc. 4: e001594, 2015

☆☆助成金受領者へのお願い☆☆

対象研究に関し発表される場合には、必ず“公益財団法人 先進医薬研究振興財団（英文の場合は、SENSHIN Medical Research Foundation）の助成による”旨を書き添えていただくと共に、別刷を本財団にご提供下さい。

平成 24 年度（第 7 回）特定研究助成の研究成果報告会

平成 27 年 11 月 5 日（木）、三菱開東閣にて、理事会及び評議員会終了後に平成 24 年度の特定研究助成受領者による研究成果報告会を開催しました。東京医科歯科大学 難治疾患研究所 教授 清水重臣先生による、「細胞に蓄積するごみと病気」という演題でご発表いただきました。座長は当時の選考委員会の委員長を務められた武田雅俊先生にお願いしました。



報告者・清水 重臣 先生



座長・武田 雅俊 先生

清水先生は、不具合のあるタンパク質やオルガネラといった細胞内のゴミを排除するシステムであるオートファジーについて、[現在までのオートファジー研究]、[オルタナティブ オートファジー 発見の経緯]、[オルタナティブ オートファジーに関連する遺伝子の発見]、[創薬ターゲットとしてのオートファジー] の順にご報告されました。

まず、現在までのオートファジー研究として、オートファジーの過程は、隔離膜と呼ばれる膜が形成され、不具合のあるタンパク質やオルガネラがその膜内に移され、その後リソゾームと融合することで分解されること。オートファジーの分子機構として autophagy-related gene5 (Atg5) や Atg7 等の分子が不可欠であると考えられていたこと。オートファジーの役割として、細胞の新陳代謝、細胞寿命（老化）、細胞分化、感染防御等が研究されていることを紹介されました。

次に Atg5 が関与しないオルタナティブ オートファジーの発見を以下の実験により証明されました。Atg5 欠損マウスから細胞を分離し、外部刺激として Rapamycin を作用させてもオートファジーは生じなかったが、Etoposide を作用させるとオートファジーが認められた。赤芽球から赤血球が分化していく過程にはたらくオートファジーの研究において Unc-51-like kinase 1 (Ulk1) 欠損マウスの赤血球ではオートファジーが起きなかったが、Atg5 欠損マウスの赤血球ではオートファジーが起きた。Ulk1/Atg5 二重欠損マウスの赤血球ではオートファジーが起きなかった。以上の知見により Ulk1 に依存した Atg5 非依存的オートファジーの存在を発見したことを紹介されました。

また、オルタナティブ オートファジーに関連する遺伝子の研究から、alternative autophagy (Aag) 1 ～ 12 の遺伝子を同定したことを紹介されました。また、Aag3 を臓器特異的に欠損させたマウスの所見を紹介されました。血液特異的に Aag3 を欠損させたマウスでは、白血病の所見が、

心臓特異的に Aag3 を欠損させたマウスでは肥大型心筋症の所見が、神経組織特異的に Aag3 を欠損させたマウスでは神経に変性タンパク質の蓄積が認められた。また、変性タンパクの蓄積には性差があり、オスにのみ特異的に認められる等の実験成績を紹介されました。

オートファジーを創薬ターゲットとした研究の 1 例として、ポリグルタミン病をとりあげられました。細胞のオートファジー機能を亢進する化合物をスクリーニングし、TMDB03 と呼ぶ化合物を見出し、ポリグルタミン病モデルマウスに投与したところ、症状の改善が認められたとの成績を紹介されました。

最後に従来、血液疾患は血液内科、神経変性疾患は神経内科と異なる疾患として対処されてきたが、細胞のオートファジー機能異常という同一の観点からとらえられる可能性を指摘されて講演を終了されました。

講演終了後、参加された理事、評議員の先生方より、オルタナティブ オートファジーを生じる刺激は何か、感染防御にオルタナティブ オートファジーはどう関与しているのか、発がんとの関連性はどうか等多数の質問がありました。



報告会場

助成金交付認定書伝達式

本財団の認知度の向上を目的に精神薬療、血液医学、循環医学の各分野における若手研究者助成並びに海外留学研究助成において、研究内容の評価が高かった先生方を訪問し、助成金交付認定書の伝達式を行いました。今年度の認定書の伝達は海外留学助成金交付者の和田剛志先生、近藤健治先生、刀坂泰史先生、若手研究者助成金交付者の鶴身孝介先生、野村征太郎先生、吉崎歩先生の6名の先生方でした。

先生方に本財団の紹介や助成金受領者の義務等を紹介させていただいた後、推薦者の丸藤哲教授、岩田仲生教授、森本達也教授、村井俊哉教授、小室一成教授、佐藤伸一教授を交えて記念の写真撮影を行いました。

ご多忙の中、貴重なお時間をいただきまして大変有難うございました。本財団の助成が先生方の研究の一助となり、研究が益々発展することを願っております。

○平成27年12月10日（木） 血液医学分野：海外留学助成

場 所：北海道大学大学院医学研究科 侵襲制御医学講座 救急医学分野 教授室

推薦者：教授 丸藤 哲 先生

受領者：助教 和田 剛志 先生



和田先生



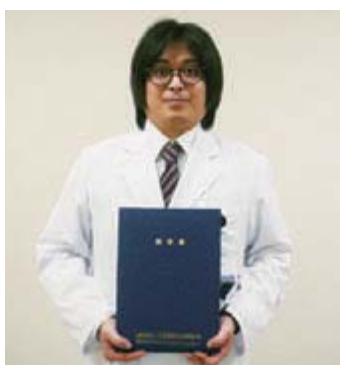
和田先生、丸藤先生

○平成27年12月14日（月） 精神薬療分野：海外留学助成

場 所：藤田保健衛生大学医学部 精神神経科学講座 医局

推薦者：教授 岩田 仲生 先生

受領者：助教 近藤 健治 先生



近藤先生



近藤先生、岩田先生

○平成 27 年 12 月 16 日（水） 循環医学分野：海外留学助成

場 所：静岡県立大学薬学部 分子病態学分野 教授室

推薦者：教授 森本 達也 先生

受領者：講師 刀坂 泰史 先生



刀坂先生



富常務理事、刀坂先生、森本先生

○平成 27 年 12 月 17 日（木） 精神薬療分野：若手研究者助成

場 所：京都大学大学院医学研究科 脳病態生理学講座（精神医学） 教授室

推薦者：教授 村井 俊哉 先生

受領者：客員研究員 鶴身 孝介 先生



鶴身先生



鶴身先生、村井先生

○平成 27 年 12 月 21 日（月） 循環医学分野：若手研究者助成

場 所：東京大学大学院医学系研究科 循環器内科学 教授室

推薦者：教授 小室 一成 先生

受領者：特任研究員 野村 征太郎 先生



野村先生



野村先生、小室先生

○平成 27 年 12 月 21 日（月） 血液医学分野：若手研究者助成

場 所：東京大学大学院医学系研究科・医学部 皮膚科 教授室

推薦者：教授 佐藤 伸一 先生

受領者：講師 吉崎 歩 先生



吉崎先生



富常務理事、吉崎先生、佐藤先生

海外留学だより

海外留学助成を受けられた研究者のうち、本年度に海外留学だよりを送付頂きました方々は、次のとおりです。

■精神薬療海外留学助成

第 18 回（平成 26 年度）

大室 則幸 東北大学病院 精神科

留学先：Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience King's College London U.K.

■血液医学海外留学助成

第 32 回（平成 26 年度）

江里口 雅裕 九州大学大学院医学研究院 病態機能内科学

留学先：Cedars-Sinai medical center, U.S.A.

■循環医学海外留学助成

第 9 回（平成 26 年度）

伊藤 雅基 北海道大学大学院医学研究科 神経病態学講座 脳神経外科

留学先：Department of Neurosurgery, Stanford University, School of Medicine, U.S.A.

植川 顕 熊本大学附属病院 脳神経外科

留学先：Brain and Mind Research Institute, Weill Cornell Medical College, U.S.A.



ロンドンへの留学で体験していること

大 室 則 幸

東北大学病院 精神科

留学先：Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience King's College London U.K.

私は、先進医薬研究振興財団より海外留学助成の御支援を頂き、平成27年4月より英国ロンドンのキングスカレッジ精神医学研究所 (IoPPN: Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience) に研究留学をさせて頂いております。ここには、英国内のみならず、他のヨーロッパ地域やそれ以外の地域からも多くの研究者や大学院生が集まってきています。また、私の研究スペースのある Denmark Hill キャンパスは、英国内最大のメンタルヘルスのトレーニング機関であり、「モーズレイ処方ガイドライン」などの臨床実践ガイドラインを刊行していることでも知られているモーズレイ病院と隣接しており、臨床・研究における相互協力が行われています。

私は、IoPPNの中でも最大の研究部門である Psychosis Studies のグループに所属し、Philip McGuire 教授の指導を受けながら、精神病発症リスク状態 (ARMS: At-risk mental state) において、認知機能が臨床転帰にどのように影響するかという研究に取り組んでいます。近年、統合失調症に代表される精神病性障害に対する早期介入のための研究が世界中で盛んに行われており、特に、精神病未発症であるものの、精神病閾値下の陽性症状の出現などにより精神病発症のリスクが高まった状態と判断される ARMS の病態や臨床経過についての関心が高まっています。この ARMS の状態において適切な観察や必要に応じて介入が行われることにより、精神病発症を未然に防ぐことや、たとえ発症したとしても、その後すみやかに必要な介入が行われることによって、慢性化や機能低

下を防ぐことができると考えられています。一方で、ARMS の状態にある対象者への介入については、本来必要のないかもしれない対象者にも介入が行われうる可能性があり、スティグマを生むリスクや、医療資源の過剰投入につながるといったリスクも存在します。こういった点からも、それぞれの ARMS の対象者における将来的な転帰を適切に予測するための指標が求められています。そのような指標の一つとして、私は、認知機能、とりわけ社会的認知機能と呼ばれる認知機能の評価が、ARMS の将来的な転帰を予測しうる可能性についての研究に取り組んでいます。私は、日本においては、東北大学病院精神科の早期精神病専門外来 (SAFE クリニック) において ARMS の臨床や、神経認知、社会的認知についての研究を行ってきました。ここ IoPPN においては、オランダなどを始めとする他国の研究施設とも積極的に多施設研究を行っており、ARMS の研究においても、EU-GEI という5ヶ年のプロジェクトが行われており、私の留学のタイミングは、このプロジェクトにおける対象者のリクルートが終了を迎えつつある時期と一致しており、幸運にもこのプロジェクトにおけるデータの一部を解析させて頂けることになりました。これによって、日本国内では集めるのが困難な数の対象者のデータを解析することができる見込みです。

私は、妻と6歳と4歳の息子たちを伴っての渡英となりました。子供たちは現在、現地の小学校に通学しています。こちらの新学期が9月スタートであることも影響し、日本では幼稚園の年少にあた

る下の息子が、こちらでは小学生（レセプションクラスと呼ばれる1年生の下に学年に在籍しています）として兄と一緒に小学校に通うことになったのは驚きでした。子供たちは、突然の英語の環境に対する戸惑いも大きいようですが、私の住んでいる地域には多くの日本人が住んでいる地域でもあるため、日本人の同級生も多く、顕著な不適応を起こさずに、ほどほどの負荷で異文化交流を楽しめているようです。

今回の渡英は私にとって初めての海外生活でもあり、研究の面以外のことで感じるものがたくさんあり、逆に改めて日本のことを見直すいい機会を得られていると感じています。こちらで暮らす人たちや街並をみて、最も感じたことは、日本にはない「余裕」があるということでした。ロンドン首都であるにもかかわらず、大きな公園がいたるところにあり、そこで多くの人たちがゆったりと過ごすことを楽しんでいます。街には電柱もなく、景観を損ねることもありません。深夜で

もコンビニのライトが灯っている日本と比べると、街全体が、にぎわっていても、どこか落ち着いているという印象を受けます。自然との調和や、わび・さびなどといった日本人が大切にしてきたはずの情感が、利便性や効率性といったことを引き換えに、日本では大事にされなくなっているということを痛感しています。電車や地下鉄のダイヤが頻繁に乱れたり、日曜の店の営業時間が短かったりといった日本では感じられなかった不便さもある半面、そのようなことで目くじらをたてたりしないような心の寛さやゆとりをこちらの人たちは持っており、それこそが真の豊かさなのではないかと思っています。そして、そういった余裕が、この国が大切にしてきた紳士的な態度を生み出しているのだと思います。駅では、ベビーカーや重い荷物を持った人に声をかけて助ける人の姿が見られない日はありません。

〔原稿受領：2016年1月〕



IoPPNの研究所入口。キャンパス内には緑が多く、野生のリスに出会うこともあります。



ロサンゼルスでの留学経験

江里口 雅 裕

九州大学大学院医学研究院 病態機能内科学
留学先：Cedars-Sinai medical center, U.S.A.

現在、留学しているアメリカ西海岸のロサンゼルスは、年中温暖な気候で夏は湿度が低いため過ごしやすく、日陰はヒンヤリとしています。冬は暖かいために厚手のコートは要りません。日本とは明らかに違う真っ青な空は日々バカンスの様な解放感を感じます。また、食事に関しては、西海岸の素晴らしい気候で育ったフルーツは安くて美味しく、加えてロサンゼルスはアメリカの中でも最も日本の食材がそろいやすい場所でもあります。この気候に慣れてしまうと日本の厳しい冬や湿度の高い梅雨は経験したくなります。

留学先である Cedars-Sinai medical center は、非営利団体としては西海岸最大規模の病院に研究施設が併設され、雇用者数も1万人を超えるメガ施設です。ラボのPIである Dr. Kenneth E. Bernstein は、ACE（アンジオテンシン変換酵素）の第一人者であり25年以上テーマを変えることなくACE研究の最先端を常にリードされています。最近の研究の中心は、“ACEの血圧への関わり”から“ACEの免疫、炎症への関わり”へとシフトし、色々な臓器および疾患でのACEの免疫学的な役割を中心に解明を続けています。自分の当ラボでの研究テーマは腎臓内科医であることから、糖尿病性腎症における腎臓内での局所ACEがどのように腎症の進行に関与するかを研究しています。

まず留学当初にぶち当たった難関が英語の壁でした。ラボメイトに日本人はおらず、研究でタッグを組んでいるアルゼンチン人は英語がとても堪能で、その他のスタッフも少なくともmeetingでdiscussionを自由にできるレベルでした。前から分

かっていた事でしたが、自分の英語力が如何に低いかを痛感させられました。となりのラボに在籍する日本人の友人からのアドバイスによると、英語に対する慣れは“3の法則”で3週間、3ヶ月、3年で大分変わる事を聞き、3ヶ月経過するのをひたすら待ちました。しかし、思ったほど変わりません。見るに見かねたのかDr Bernsteinから病院内の英語発音クラスを紹介され、毎週3時間の授業を受けるようになりました。ロサンゼルスを含む西海岸には英語を第二言語とする人が特に多い事もあるのですが、このように職員に対する無償の教育を提供する姿勢にアメリカの底力を感じました。当初は発音しても理解されない事に対して“単語”で会話する姿勢がついていましたが、発音を教えてもらい自信がつく事により“文章”で話す事のハードルが下がっていくことを最近感じています。

次に、日本とはかなり異なるアメリカでの基礎研究の実情を少しお話しします。アメリカで基礎研究を継続していくためには、1にも2にもgrant(資金)が大事になります。ラボを経営しているPIは、このgrantから、研究施設のテナント料、自分の給料を含む研究員やラボマネージャーの人件費を消費しながら日々の実験での諸費用を捻出する必要があります。日本ではgrantが途切れても就職先からの給料がストップしたり、実験スペースを取り上げられたりはしません。アメリカのgrantはケタ違いに大きい為に自由度は高いですが、その代わりに代償も大きく、一旦grantが途切れてしまうと研究職という立場すら危うくなります。その為、次のgrantを獲得するために常に継続的に結果を出

し続ける必要があります。そのような中で実験に必要な備品を注文する時は非常に気を使いましたが、ボスのDr. Bernsteinは『必要な時は高価なものでも躊躇せずに買いなさい。躊躇する事で実験に遅れが生じれば一番高い人件費がかさむ原因になるのだから』と言われていました。研究の手技・実技のみならず、研究ユニットの運営を垣間見る事が出来てとても勉強になりました。

最後になりますが、現在、充実した留学が送れているのは先進医薬研究振興財団からの助成金により実現できました。深く感謝を申し上げます。また、残り半分となってしまった1年間の貴重な留学生活を無駄にしない様に充実した日々を過ごして行こうと思います。

〔原稿受領：2016年2月〕



Dr. Bernstein 家にてホームパーティー（Dr Bernstein 左から2人目、筆者は一番右）



スタンフォード大学研究留学体験記 ～アントレプレナーシップの学び舎より～

伊藤 雅基

北海道大学大学院医学研究科 神経病態学講座 脳神経外科

留学先：Department of Neurosurgery, Stanford University, School of Medicine, U.S.A.

わたしは、平成26年11月に、平成26年度（第9回）循環医学分野海外留学助成を拝受し、客員研究員として米国カリフォルニアのスタンフォードに位置する、スタンフォード大学脳神経外科（Chairman, Dr. Gary K Steinberg）に研究留学する機会をいただきました。現在、留学生活、丸1年が過ぎましたので、こちらでの研究生活について、ざっくばらんにご報告させていただきたいと思います。

研究内容は、“もやもや病の発症素因と病態修飾因子の解明”という日本で取り組んでいた研究テーマを発展させるべく考案しました。もやもや病を遺伝的側面から、日本人と、アメリカ合衆国特有の多様な人種で比較することで掘り下げることに、より、病態解明・診断治療技術の向上につなげようとするものです。留学先のchairmanであるSteinberg教授は、米国では日本以上に希少疾患であるもやもや病の症例経験を数多く有し、多くのPhDを抱えた基礎研究・トランスレーショナルリサーチラボのPIとしても知られる、脳神経外科医師であり、neuroscienceの研究者でもある先生です。渡米後は、教授との複数回のindividual meetingや、他の研究者やもやもや病に関わる脳神経外科医とのbrain stormingを重ねました。約2ヶ月で、おぼろげであった私のideaを研究計画として形作り、ボランティア検体の収集を経て、もやもや病患者さんの臨床検体を用いた実際の研究としてスタートさせることができました。現在dataに溺れかけ

ながら（本当に溺れて沈んでしまいそうなので、仲間のbioinformaticsのプロがいつも助けてくれます（笑））、成果としてまとめ上げるべく、四苦八苦しております。幸い、本助成金をいただき、1年間visiting scholarとして、上記臨床研究と基礎研究に従事することができました。必死さだけは伝わったようで（英会話は一向に上達しませんが、四苦八苦踏ん張っているのは察していただけたようです・・・）、客員研究員からポスドク研究員に身分変更していただき、予定を延長して再来年までこちらで合計3年間研究を続けさせていただくことができそうです。

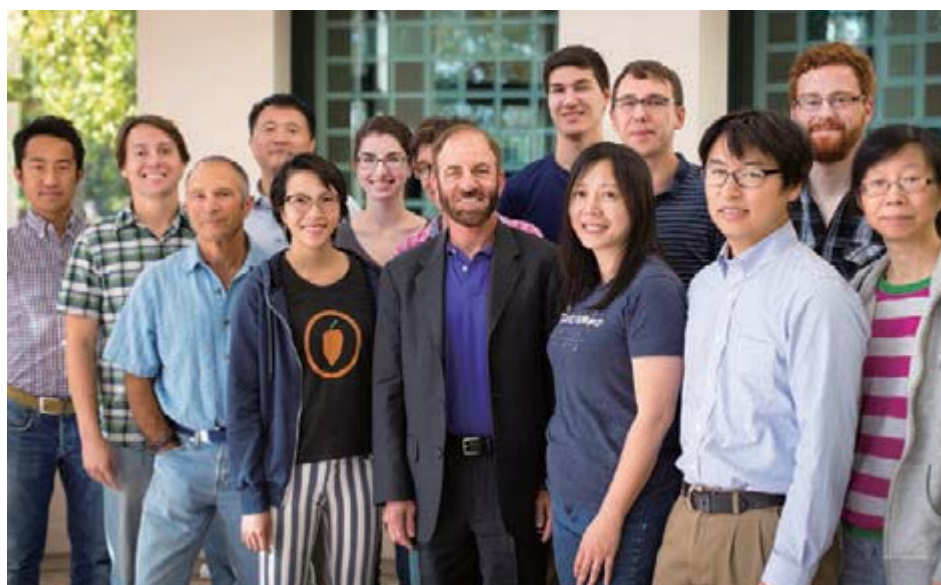
話はかわって、スタンフォード大学は、シリコンバレーの中心に位置する全米屈指（世界的にも屈指の）研究大学であり、世界中から著名な研究者および研究者の卵が集まってきている所です（さらにいうと研究者のみにとどまらず多くの業界におけるリーダーの卵が学んでは飛び立っていく場所のようです）。医学部においてキーワードは、研究費をとってこられる人間ということのようで、世知辛いような気もしていました。が、ある意味中身・内容のある人たちの集まりなのだという理解で落ち着きました。ラボメンバーは、出身がアメリカ、南米ブラジル、ヨーロッパ（ドイツ・オランダ・イギリス）、アジア（中国・台湾・日本・ベトナム）と国際色豊かです。上述のごとく、大学全体としては、学際色豊かであり、ポスドクとしての横のつながりで、多くの別分野の研究者と

知り合うことができましたし、日本人ということで、普段は知り合う機会のない、企業派遣・省庁派遣・裁判官/司法関係者・メディア新聞社の方々・文化系学部や工学/エンジニア関係の大学の先生など、様々なバックグラウンドの方と知り合ったり、その方々の勉強会に参加させてもらったりすることができて、自分の人生経験値があがった気持ちになっています。これは、自分の中での、留学目的の一つでもありました。標題に掲げたアントレプレナーシップという言葉は、西部鉄道開拓で財をなした大学の創立者（Stanford氏）の理念をなす言葉の一つだそうです。125年前の大学創立時、アメリカ東部（中心地）にあるハーバード大学などの一流大学や国家の中心地に負けじと、何事も切り開いていこうという、開拓者精神を表す言葉のようです。自動車・IT産業に続き、世界のハイテクをリードし続けているアメリカの、“新たな価値を生み出そう”“アイディアを形にしよう”とするモチベーションの高さにいつも圧倒されています。

生活に関しては、世界中から知力と財力が集中している場所のためか、家賃をはじめ、物の値段がべらぼうに高いのが特徴です。朱に交われば赤くなることを信じて、散財しています（笑）。気候は温暖で、湿気を感じることは少ないです。日本人も適応しやすい食材と文化の宝庫のような所で、快適に暮らすことができています。FacebookやiPhoneなど、SNS・IT通信技術の恩恵にあずかり、日本との通信環境もバッチリで、日本の家族や友人とのやりとりにも劳しません。

以上、冒頭で記載した通りの、ざっくりバラバラな内容の報告記に成ってしまったことをお詫び申し上げます、最後まで読んでいただいたことに感謝いたします。特に、このたび素晴らしい留学の機会を得るきっかけを与えていただいた、先進医薬研究振興財団の皆様に心から感謝申し上げますとともに、ますますのご発展を祈念しております。

〔原稿受領：2016年6月〕



Department of Neurosurgeryの中で、筆者（前列むかって右から2人目）の所属するstroke researchのグループメンバーでの集合写真。写真中央がSteinberg教授



ニューヨーク留学便り

植 川 顕

熊本大学附属病院 脳神経外科

留学先：Brain and Mind Research Institute, Weill Cornell Medical College, New York, U.S.A.

私は2015年4月からニューヨーク州のマンハッタンにある Weill Cornell Medical College の Brain and Mind Research Institute に留学しています。“Brain” と “Mind” という名称の通り、そこでは脳・神経に関する解剖・生理・病理から認知・行動・精神活動まで多岐にわたる神経科学分野の基礎研究および臨床研究が行われています。私が働く研究室はそのなかに含まれており、この機関全体のディレクターでもある Dr. Costantino Iadecola が Principal investigator (PI) を務めています。そして私は、この研究室の中心的研究テーマである脳卒中・アルツハイマー病・血管性認知症における神経と血管との相互の機能と病態について、日々研究を行っています。

研究室には faculty と post-doc を含め 20 名ほどの研究者が、イタリア、オーストリア、スペイン、ドイツ、スイス、中国、韓国、日本など世界各地の国々から研究のために集まっています。さらに研究室の中には経験豊富なテクニシャンや事務員の他、アメリカ国内外から研修に来た学生たちなど、様々な国やポジションの人々が集まって研究に従事しています。みんなお互いを尊重しながらとてもいい雰囲気です。

研究室の私の部屋は、私を含めて各国から来た 4 人の post-doc でシェアしていますが、実験の話題に限らず、趣味や家族・子供たちの話などをしながら、いつも和気あいあいと研究をしています。上司も厳しくも熱意をもって私の実験の助言・指導を行ってくれます。また、学生たちはとても意欲的で、私の実験を快く手伝ってくれます。ただし、働く

上で“言葉の壁”は、やはり大きな問題です。研究室の環境に慣れるまでは、意思疎通に苦労する日々が続きました。それでも、他の国から来た研究者たちはみんな、私の下手な英語に真剣に耳を傾けてくれますし、彼らは多少の訛りがあっても堂々と自分の考えを述べて実験を進めています。その姿を見て、“相手を尊重しながら、臆せずに自分の意見を伝え、チャレンジすることの大切さ”を学びました。

また、マンハッタンおよびその周辺には一流の研究施設・医療機関がたくさんあり、300 人以上の日本人研究者が生命科学の様々な分野で活躍しています。私が所属する Weill Cornell Medical College のすぐ隣には Rockefeller University と Memorial Sloan-Kettering Cancer Center があり、この3つの研究施設にも多くの日本人研究者が在籍し、毎年お花見・BBQ・新年会などの交流会が定期的に開かれています。マンハッタンにはその他、ニューヨーク大学、コロンビア大学、マウント・サイナイ医科大学など、列挙しきれないほどたくさんのトップクラスの研究施設・医療機関があり、こうした周辺環境を含めて、たいへん恵まれた環境の中で研究ができています。

そして、マンハッタンという街はそこに住む人々にまるで映画のような驚きと感銘を与えてくれます。研究室から少し歩けば、すぐそこに有名な“5 番街”やセントラル・パークがあり、地下鉄に乗ればすぐにタイムズ・スクエアにも行くことができます。摩天楼が立ち並び、多数のイエローキャブが走り回り、様々な国や人種の人々が行き交いま

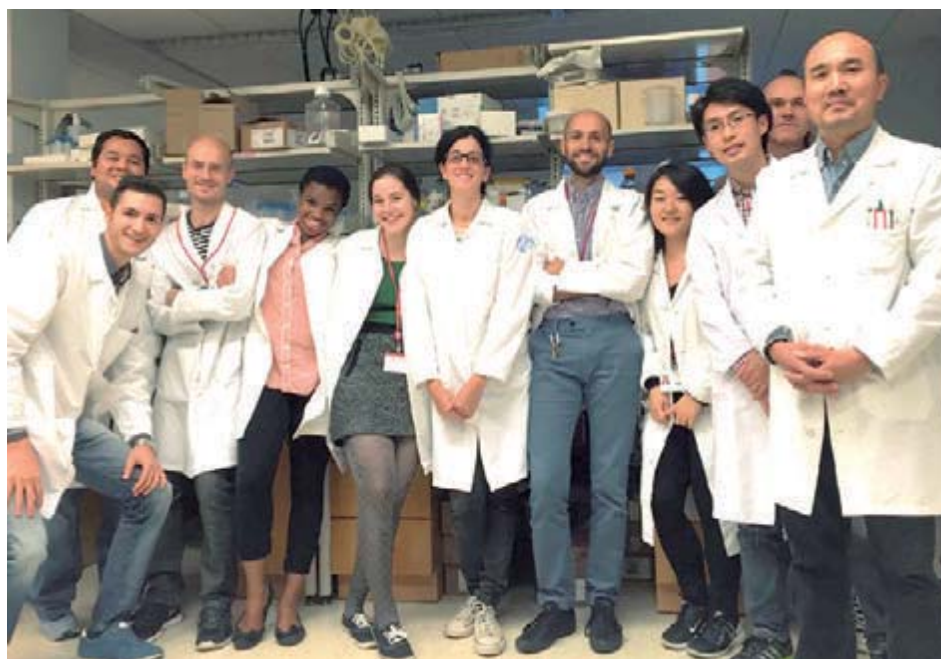
す。まるで映画か絵ハガキの中を歩いているかのような不思議な錯覚に陥ります。また、メトロポリタン美術館や近代美術館などの世界的に有名な美術館が多数あり、ブロードウェイではミュージカルが連日開催され、さらに世界の金融の中心地ウォールストリートもあり、ニューヨークはまさに芸術・文化・経済の中心地です。

そんな大都会の中で、私は、妻と3人の子供たちとともに新たな生活を始めました。ただ、ニューヨークにきた時には一番下の子がまだ生後3ヶ月と幼かったこともあり、生活に慣れるまでは本当に大変な日々が続きました。ベビーカーで地下鉄に乗るにも、駅にエレベーターがなかったり故障していたりしますし、車がないので毎日の買い物を運ぶのも一苦勞です。それでも、生活しているうちに見えてくるものがあります。それはこの街の人たちの温かさ（助け合いの精神）です。地下鉄やバスに乗ると周りの人たちはすぐに席を譲って

くれたり、困った時には手を貸してくれたりします。また、家族で街を歩いていると知らない人から突然、“What an adorable family!! (なんて愛らしい家族でしょう!)”などと笑顔で話しかけられます。これまでにいろいろな苦勞や困難がありましたが、いまでは生活環境にもずいぶんと慣れ、家族みんなで刺激的なこのニューヨーク生活を謳歌しています。

こうして、日本とはまったく違った環境で研究に専念するとともに家族と一緒に過ごす時間も十分にとることができ、充実した留学生活を送っています。これも、留学にあたって貴財団より貴重なご支援をいただいたおかげです。心から御礼を申し上げるとともに、益々のご発展を祈念いたします。

〔原稿受領：2016年3月〕



研究室でのワンショット 右から3番目が筆者

財 団 概 要

1. 沿 革

本財団は、昭和 43 年 12 月に吉富製薬株式会社の寄付を受けて、“精神神経科領域における臨床薬理学及び薬物治療学の研究（精神薬療研究）の推進”を目的として「財団法人 精神神経系薬物治療研究基金」として設立されました。

その後、昭和 57 年 2 月に株式会社ミドリ十字の寄付によって“血液成分その他の高分子蛋白の医学分野における研究（血液医学研究）の振興”を目的として設立された「財団法人 内藤医学研究振興財団」を統合し、平成 11 年 4 月から「財団法人 精神神経・血液 医薬研究振興財団」として財団活動を継承しました。

平成 14 年 3 月に、新たに“循環障害に起因する諸疾患に関する研究（循環医学研究）の振興”を目的に追加するとともに、名称を「財団法人 先進医薬研究振興財団」に変更しました。

平成 23 年 4 月には、内閣総理大臣より公益認定を受け、「公益財団法人」として、新たなスタートをして活動しております。

2. 目 的

本財団は、精神神経科領域における臨床薬理学及び薬物治療学の研究（精神薬療研究）と血液成分その他の高分子蛋白の医学分野における研究（血液医学研究）並びに循環障害に起因する諸疾患に関する研究（循環医学研究）に対する助成、顕彰等を行ない、医学及び薬学に関する先進的な研究の振興を図り、もって国民の医療と保健に貢献することを目的としております。

3. 事 業

本財団の事業は、財団の目的に沿う研究に対する助成事業、研究報告会、市民公開講座、フォーラム、刊行物等で、その主な概要は次のとおりであります。

1) 助成事業

(1) 一般研究助成

わが国の精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究振興を目的として、独創的で医療ニーズの高い研究に研究助成金を交付するものです。

(2) 若手研究者助成

わが国の精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究分野における若手研究者（応募時 39 歳以下）の育成を目的として、新規で将来性のある研究に研究助成金を交付するものです。

(3) 特定研究助成

精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究分野に共通するテーマ、もしくは分野間にまたがる協同研究（いずれも、国際協同研究を含む）で、臨床上有用な先進的研究の振興を目的として研究助成金を交付するものです。

(4) 海外留学助成

わが国の精神薬療、血液医学並びに循環医学の研究分野における国際的視野に富む人材の育成を目的として、若手研究者（応募時 39 歳以下）に助成金を交付するものです。

(5) 被災地支援研究助成

東日本大震災で被災された地域（岩手・宮城・福島など）における精神薬療分野、血液医学分野、循環医学分野に関わる災害医療をテーマにした調査・研究に助成し、医学・薬学に関する先進的な研究の振興を図る目的で平成 23 年度及び平成 24 年度に助成を行いました。

2) 特定研究助成研究成果報告会

特定研究助成の研究成果について、毎年 11 月に報告会を開催しております。

3) 研究報告会

精神神経系薬物治療研究報告会

精神薬療分野の助成研究成果の発表を目的に、毎年 12 月上旬に報告会を開催しております。

4) 市民公開講座

・テーマ：認知症の予防と介護

平成 21 年 2 月 21 日開催

5) フォーラム

財団の事業として、不定期にフォーラムを開催しております。

[先進医薬フォーラム]

・テーマ：血管障害からみた脳と心臓

平成 16 年 2 月 7 日開催

・テーマ：微小循環と脳機能障害のリンケージ

平成 17 年 2 月 26 日開催

・テーマ：時間軸からみた脳血管障害の予防と治療

平成 18 年 1 月 28 日開催

[先進医薬研究振興財団 発足 10 周年記念式典]

平成 25 年 3 月 2 日開催

・永年功労者表彰

・贈呈式

・特別講演 「歴史と冒険のシンクロニシティー」 —遣唐使をめぐる—

演者 辻原 登 先生（芥川賞作家）

「宇宙の創生と新たに生じた謎」

演者 佐藤 勝彦 先生（自然科学研究機構長、東京大学名誉教授）

6) 刊行物

(1) 先進医薬年報

毎年 8 月に、当財団の 1 年間の活動などをまとめて、機関誌として発行しております。

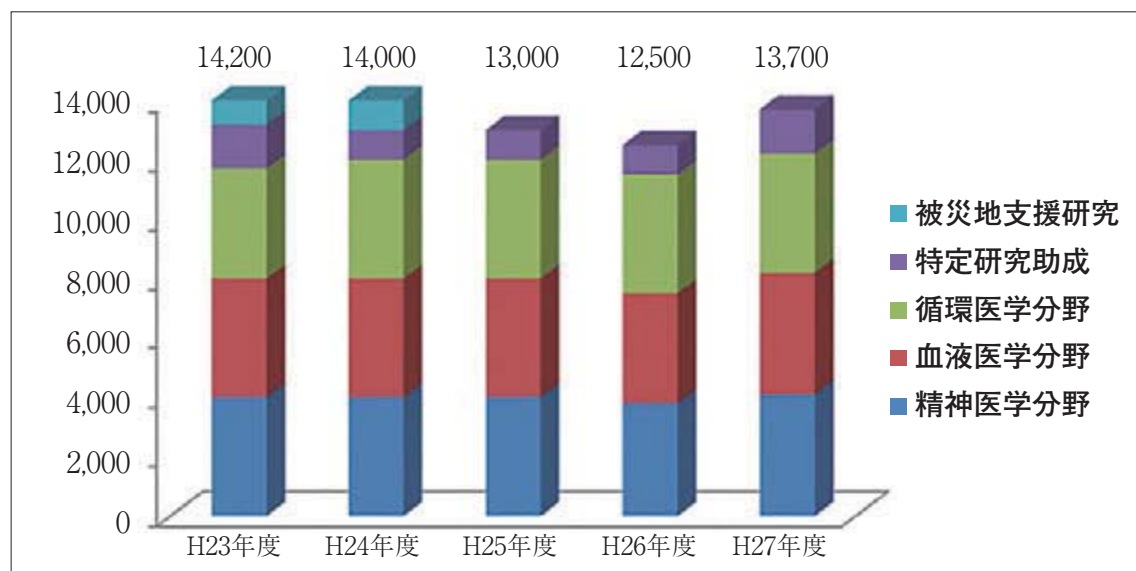
(2) 研究成果報告集

毎年 3 月に、精神薬療、血液医学、循環医学並びに特定研究助成の研究成果報告集を発行しております。

4. 助成金額の推移

財団設立以来の助成金交付累積額は 27 億 5,285 万円、交付件数は 3,302 件となります。

最近 5 年間の助成金の推移（単位：万円）



5. プロフィール

設 立 年 月 日：昭和 43 年 12 月 12 日

基 本 財 産：10 億円（平成 28 年 3 月 31 日現在）

行 政 庁：内閣府

公 益 財 団 法 人

認 定 日：平成 23 年 3 月 29 日

登 記 日：平成 23 年 4 月 1 日

出 捐 会 社：田辺三菱製薬株式会社

6. 役員、評議員、選考委員、名誉理事 【五十音順】

(平成 28 年 7 月 1 日現在)

1) 役 員

理 事 長	村 松 実	田辺三菱製薬株式会社
常務理事	富 修※	田辺三菱製薬株式会社
理 事	浅 野 孝 雄	小川赤十字病院 名誉院長、南古谷病院 顧問
	池 田 康 夫	学校法人 根津育英会 武蔵学園 副理事長、早稲田大学 特命教授、慶應義塾大学 名誉教授
	加 藤 進 昌	昭和大学発達障害医療研究所 所長、(公財) 神経研究所 晴和病院 理事長
	小 山 司	大谷地病院 臨床研究センター長、北海道大学 名誉教授
	島 本 和 明	日本医療大学 総長
	鈴 木 宏 治	鈴鹿医療科学大学 特任教授、三重大学 名誉教授
	武 田 雅 俊	学校法人 藍野学院 藍野大学 学長、大阪大学 名誉教授
	樋 口 輝 彦	国立精神・神経医療研究センター 名誉理事長、一般社団法人 日本うつ病センター 理事長
	堀 正 二	大阪府立成人病センター 名誉総長、大阪大学 名誉教授
	幕 内 雅 敏	日本赤十字社医療センター 院長、東京大学 名誉教授
	三 國 雅 彦	社会医療法人 函館博栄会 函館渡辺病院 名誉院長、群馬大学 名誉教授
	峰 松 一 夫	国立循環器病研究センター 病院長
	吉 岡 章	奈良県立医科大学 名誉教授 (前理事長・学長)
	和 田 邦 義	田辺三菱製薬株式会社

※：常 勤

監 事	濱 田 宇 一	濱田宇一税理士事務所 所長
	石 井 梅 寿	田辺三菱製薬株式会社

2) 評 議 員

阿 部 康 二	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 教授
内 山 真一郎	国際医療福祉大学 臨床医学研究センター 教授、 山王病院・山王メディカルセンター 脳血管センター センター長
荻 原 俊 男	森ノ宮医療大学 学長、大阪大学 名誉教授
尾 崎 紀 夫	名古屋大学大学院医学系研究科 教授
尾 崎 由基男	笛吹中央病院 院長
鹿 島 晴 雄	国際医療福祉大学大学院 教授
金 倉 讓	大阪大学大学院医学系研究科 教授
神 庭 重 信	九州大学大学院医学研究院 教授
小 林 祥 泰	医療法人社団 耕雲堂 小林病院 名誉院長、島根大学 名誉教授

小 室 一 成	東京大学大学院医学系研究科 教授
坂 田 洋 一	自治医科大学 客員教授・名誉教授
白 川 治	近畿大学医学部 教授
砂 川 賢 二	九州大学循環器病未来医療研究センター 特任教授
西 川 伸 一	株式会社 生命誌研究館 顧問、NPO法人 オール・アバウト・サイエンス・ジャパン 代表
西 川 徹	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
原 寿 郎	福岡市立こども病院 院長
原 田 実 根	唐津東松浦医師会 医療センター 院長、九州大学 名誉教授
丸 山 征 郎	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 特任教授
山 田 和 雄	名古屋市総合リハビリテーションセンター センター長
山 脇 成 人	広島大学大学院医歯薬保健学研究院 教授
菊 地 松 夫	田辺三菱製薬株式会社
久 保 肇	田辺三菱製薬株式会社
中 田 繁 樹	田辺三菱製薬株式会社

3) 名誉理事

尾 前 照 雄	国立循環器病研究センター 名誉総長
笠 原 嘉	桜クリニック 名誉院長、名古屋大学 名誉教授
風 祭 元	帝京大学 名誉教授
黒 田 重 利	(公財) 慈圭会 慈圭病院 顧問、岡山大学 名誉教授
齋 藤 英 彦	国立病院機構名古屋医療センター 名誉院長、名古屋大学 名誉教授
佐 藤 光 源	東北福祉大学大学院 特任教授、東北大学 名誉教授
猿 田 享 男	慶應義塾大学 名誉教授
志 方 俊 夫	(公財) ウイルス肝炎研究財団 理事
高 月 清	(公財) 田附興風会 評議員、熊本大学 名誉教授
塚 田 裕 三	慶應義塾大学 名誉教授
融 道 男	メンタルクリニックおぎくぼ 院長、東京医科歯科大学 名誉教授
早 川 弘 一	四谷メディカルキューブ 理事長・院長、日本医科大学 名誉教授
原 宏	樹徳会 上ヶ原病院 名誉院長、兵庫医科大学 名誉教授
松 下 正 明	東京大学 名誉教授
松 本 慶 蔵	(公財) 結核予防会 学術相談役、長崎大学 名誉教授
山 村 秀 夫	東京大学 名誉教授

4) 選考委員

精神薬療選考委員会

岩 田 仲 生	藤田保健衛生大学医学部 教授
笠 井 清 登	東京大学大学院医学系研究科 教授
岸 本 年 史	奈良県立医科大学 教授
下 田 和 孝	獨協医科大学 主任教授
寺 尾 岳	大分大学医学部 教授
松 永 寿 人	兵庫医科大学 主任教授
三 村 將	慶應義塾大学医学部 教授
村 井 俊 哉	京都大学大学院医学研究科 教授
森 信 繁	高知大学医学部 教授
渡 邊 衡一郎	杏林大学医学部 教授

血液医学選考委員会

渥 美 達 也	北海道大学大学院医学研究科 教授
安 藤 潔	東海大学医学部 教授
熊ノ郷 淳	大阪大学大学院医学系研究科 教授
佐 藤 伸 一	東京大学大学院医学系研究科・医学部 教授
新 蔵 礼 子	奈良先端科学技術大学院大学 教授
出 澤 真 理	東北大学大学院医学系研究科 教授
中 尾 眞 二	金沢大学医薬保健研究域医学系 教授
宮 田 敏 行	国立循環器病研究センター シニア研究員
村 田 満	慶應義塾大学医学部 教授
森 内 浩 幸	長崎大学大学院医歯薬総合研究科 教授

循環医学選考委員会

大 北 裕	神戸大学大学院医学研究科 教授
小笠原 邦 昭	岩手医科大学 教授
北 川 一 夫	東京女子医科大学医学部 教授・講座主任
北 園 孝 成	九州大学大学院医学研究院 教授
木 原 康 樹	広島大学大学院医歯薬保健学研究院 教授、広島大学 副学長
木 村 和 美	日本医科大学大学院医学研究科 大学院教授
斎 藤 能 彦	奈良県立医科大学 教授
野 出 孝 一	佐賀大学医学部 教授
福 田 恵 一	慶應義塾大学医学部 教授
吉 村 紳 一	兵庫医科大学 主任教授、脳卒中センター センター長

特定研究選考委員会

伊 豫 雅 臣	千葉大学大学院医学研究院 教授
倉 林 正 彦	群馬大学大学院医学系研究科 教授
代 田 浩 之	順天堂大学大学院医学研究科 教授
武 田 雅 俊	学校法人 藍野学院 藍野大学 学長、大阪大学 名誉教授
豊 田 一 則	国立循環器病研究センター 部門長
中 畑 龍 俊	京都大学 iPS 細胞研究所 副所長
藤 村 吉 博	日本赤十字社近畿ブロック血液センター 所長、奈良県立医科大学医学部 名誉教授
吉 村 昭 彦	慶應義塾大学医学部 教授
渡 邊 義 文	山口大学大学院医学系研究科 教授

7. 役員、評議員、選考委員の異動

1) 新 任

理 事	和 田 邦 義	(平成28年 6月10日付)
評 議 員	十 河 正 典	(平成27年11月 5日付)
評 議 員	久 保 肇	(平成28年 6月10日付)
選考委員	循環医学選考委員会	(平成28年 4月 1日付)
	野 出 孝 一	

2) 退 任

評 議 員	石 崎 芳 昭	(平成27年11月 5日付)
評 議 員	十 河 正 典	(平成28年 6月10日付)
選考委員	循環医学選考委員会	(平成28年 3月31日付)
	小 川 久 雄	

退任されました方々には、財団活動へのご尽力に深謝いたします。

事 務 局

事 務 局 長	桐 原 靖
事務局長 補佐	大 谷 渡
事 務 局 員	大 橋 良 孝
事 務 局 員	西 田 千 葉
事 務 局 員	古 舘 豊
事 務 局 員	多 田 晴 久



シメ

賛 助 会 員

本財団の事業趣旨にご賛同をいただき、平成 28 年 3 月 31 日現在で次の方々にご入会いただいております。
皆様方のご理解と温かいご支援に厚くお礼申し上げます。

【団 体】（敬称略）

田辺総合サービス株式会社
株式会社バイファ
吉富薬品株式会社
株式会社三菱ケミカルホールディングス

田辺三菱製薬工場株式会社
三菱化学エンジニアリング株式会社
株式会社菱化システム

【個 人】（敬称略）

今 田 光 昭	上 嶋 孝 博	上野山 茂 樹	大 谷 渡
大 橋 良 孝	岡 本 守 正	小木曾 康 弘	川 西 孝 子
岸 直 行	木 村 和 弘	桐 原 靖	小宮山 雅 志
武 智 和 男	辻 野 文 盛	富 修	中 川 幸 光
福 西 幸 雄	古 野 洋 一	古 山 和 弘	増 井 秀 昭
三 田 勝 美	村 松 実	山 崎 伸 也	

未来に託そうあなたのひとくち

賛助会員募集中!!



ひとつの水滴が小さな芽を
大きく育みます

- 個人年会費：1口 ￥2,000
- 団体年会費：1口 ￥20,000

会費は、有効に活用させていただきます
ご協力よろしく申し上げます

◎ 助成事業 ◎ 研究報告会の開催事業 ◎ 刊行物

－賛助会員ご入会のお願い－

本財団は、出捐会社＜田辺三菱製薬株＞の歴史と共に歩み、現在では精神薬療、血液医学、循環医学の3研究分野における優秀な研究に対する各種助成等を行うことによって、医学及び薬学に関する研究振興を図り、もって国民の医療と保健に貢献することを目的としております。

本財団活動の目的にご賛同いただける方は、常時募集しておりますので、賛助会員としてご入会下さいますようお願い申し上げます。

なお、会員の皆様から寄せられました賛助会費は、財団活動のため有効に活用させていただきます。

－ご入会に当たって－

- 1) 入会は随時受け付けいたしております。入会の場合は、「入会申込書」(本誌末尾に添付)にご記入のうえ、財団事務局までFax等にてお申し込み下さい。
- 2) 会費は、団体会員の場合年額1口2万円、個人会員の場合年額1口2千円とし、入会は各々1口以上とさせていただきます。
- 3) 会費のお振込みは、郵便局の「払込取扱票」(本誌末尾に添付)をご利用下さい。
- 4) 本財団は内閣府より「公益法人」の認定を受けておりますので、税制上の優遇措置を適用できます。
- 5) 詳しくは、下記財団事務局までお問い合わせ下さい。

電 話：06-6300-2600 Fax：06-6300-2757

E-mail：m-research@cc.mt-pharma.co.jp

U R L：https://www.smr.or.jp

入 会 申 込 書

公益財団法人 先進医薬研究振興財団

理事長 村松 実 殿

会 費	(年額)	
団体会員	1 口	2 万円
個人会員	1 口	2 千円
☐ 団体会員		
☐ 個人会員	_____ 口	_____ 円

貴財団の趣旨に賛同し、入会を申し込みます。

平成 年 月 日

[団体会員]

団体名 _____

代表者：役職、氏 名 ^(ふりがな) _____

所在地 〒 _____

担当者：所属、氏 名 ^(ふりがな) _____

連絡先電話番号 _____

[個人会員]

所属、氏 名 ^(ふりがな) _____

住所 〒 _____

電話番号 _____

編集後記

2016年4月14日に熊本県熊本地方を震源とする大地震が発生しました。被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

報道等によれば、徐々に復興も進んでいるようですが、被災地の1日も早い復興と皆様の安全をお祈り申し上げます。

先進医薬年報No.17をお届けいたします。今回は絵画の代わりに写真を入れてみました。お気づきいただけましたでしょうか。

残念なお知らせですが、先進医薬研究振興財団発足時（平成14年）の理事を務められ、名誉理事でもあった勝村達喜先生が平成28年4月25日にご逝去されました。勝村先生には6年間の長きにわたり理事として財団活動を支えていただきました。ご冥福をお祈りいたします。

さて、平成27年度の助成事業では、特定研究助成開始10周年を記念して1,000万円の助成を2件に増やしました。また、一般研究助成の選考委員会において、「極めて優秀」と評価された研究が2件（精神薬療分野、血液医学分野）選考されました。この2件については、理事会で審議いただき、200万円を助成いたしました。

一方運営面では、マイナンバー制度の対応が大きな業務となりました。昨年10月頃から準備を進め、講習会への参加、他財団の情報収集等をふまえ、「基本方針」、「取扱い規則」、「取扱い細則」を整備してきました。新しい制度ということで、具体的事例が乏しく事務局の皆様大変苦勞されました。この誌面を借りまして御礼申し上げます。

最後に、平成28年度より、Webによる助成申し込みを開始しました。財団の様々な業務の中で可能なものはペーパーレス化を進めていきたいと考えております。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

（常務理事 富 修）

公益財団法人 先進医薬研究振興財団 先進医薬年報 No.17

発行所	公益財団法人 先進医薬研究振興財団 〒532-8505 大阪市淀川区加島三丁目16番89号 SENSHIN Medical Research Foundation 3-16-89, Kashima, Yodogawa-ku, Osaka 532-8505, Japan TEL：06-6300-2600 Fax：06-6300-2757 E-mail：m-research@cc.mt-pharma.co.jp URL：https://www.smrfor.jp/
発行人	村 松 実
編集人	富 修
発行日	2016年8月20日
印刷所	株式会社 あさひ印刷 〒710-0826 岡山県倉敷市老松町2-8-24 TEL：086-422-2900 Fax：086-422-2901

ACTIVITY REPORT

No. 17

for the Advanced Medicine

August 2016

SENSHIN Medical Research Foundation